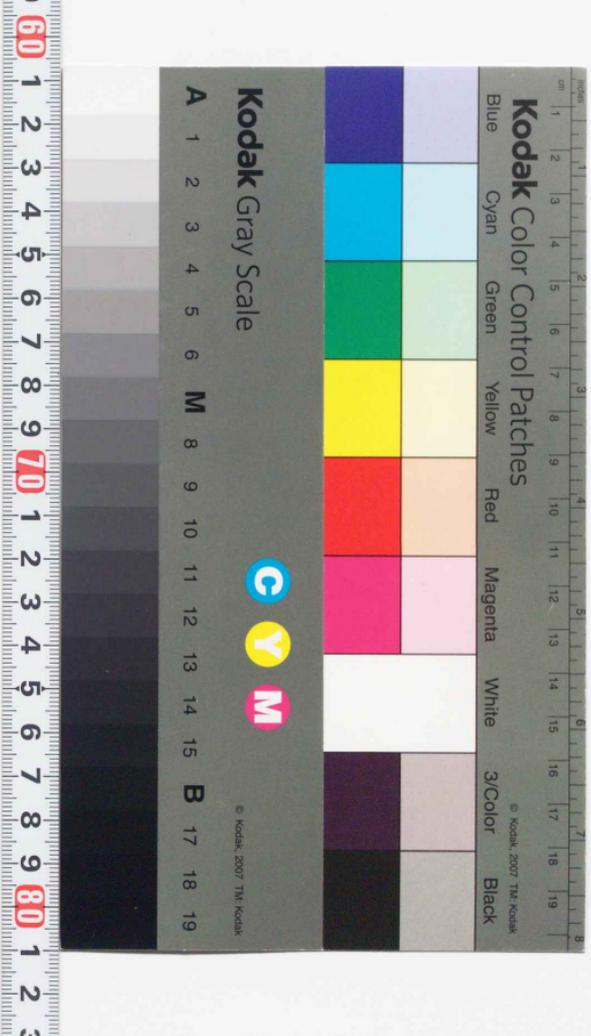


かがみがはら ふるさとめぐり

—歴史と伝説の地をたずねて—



各務原市教育委員会



序

各務原市は、はるか御嶽山（おんたけさん）にその源をもつ木曾の流れによってつくられた洪積世時代（こうせきせい）（約百万
一百万年前）の台地で、遠い原始のむかしから人々が住みはじめ、以来ここを舞台（ぶたい）として生きて
きました。そしてその人たちは数々の史跡や伝説を、また貴重な文化財（ぶんわぞう）を多く残してくれました。
市の今日の発展は、この長い歴史を生きぬいてきた人々の努力の積み重ねの上に成立したもので、その一つ一つにはその祖先のものの考え方や感じ方がにじんでおり、それは血の通った生活
文化の遺産（いさん）であると思います。

私どもは、このような文化遺産に接するとき、あらためて祖先の偉大な業績（いさ）にえりを正すとと
もに、現代に生きるものとして後世に伝えなければならぬと強く心に感じます。「かかみがは
らふるさとめぐり」発行の意義（いぎ）もそこにあります。

表紙
各務原市鷺沼三ッ池町
県指定史跡炉畑遺跡公園
題字
水口教育長

この「かかみがはら ふるさとめぐり」で郷土の歴史や伝説を知ることによってふるさとへの愛情も深まり、明日への輝かしい発展・創造にもつながるものと信じます。ぜひ、この書を多数の人々がご活用されるよう期待しております。

最後に、この編集にご協力くださいました各位に心から感謝と敬意を表して序言といたします。

昭和五十四年三月

各務原市教育長 水口一也

も く じ

第一コース 旧中山道と古墳をたずねて

コース案内図	1
貞照寺	3
うとう峠の一里塚	5
金繩塚古墳	6
中山道鶴沼宿	7
芭蕉の句碑	8
二宮古墳	9
狐塚の石棺	10
衣裳塚古墳	10
坊の塚古墳	12
八幡神社	13
歴史民俗資料館	15
薬師寺	16

第二コース 歴史のあけぼの

由下古墳群	18
新加納小休本陣	19
少林寺	20
手力雄神社	22
柄山古墳	27
コース案内図	29
前渡不動	31
畑畑周辺の遺跡	33
(中島遺跡・星塚遺跡・防風林遺跡)	
三ツ池遺跡	35
畑畑遺跡	35
民家「旧榎井家」	42
中央公民館 市民会館	44
金山寺	48
山田寺	50

第1コース
第2コース
第3コース
第4コース

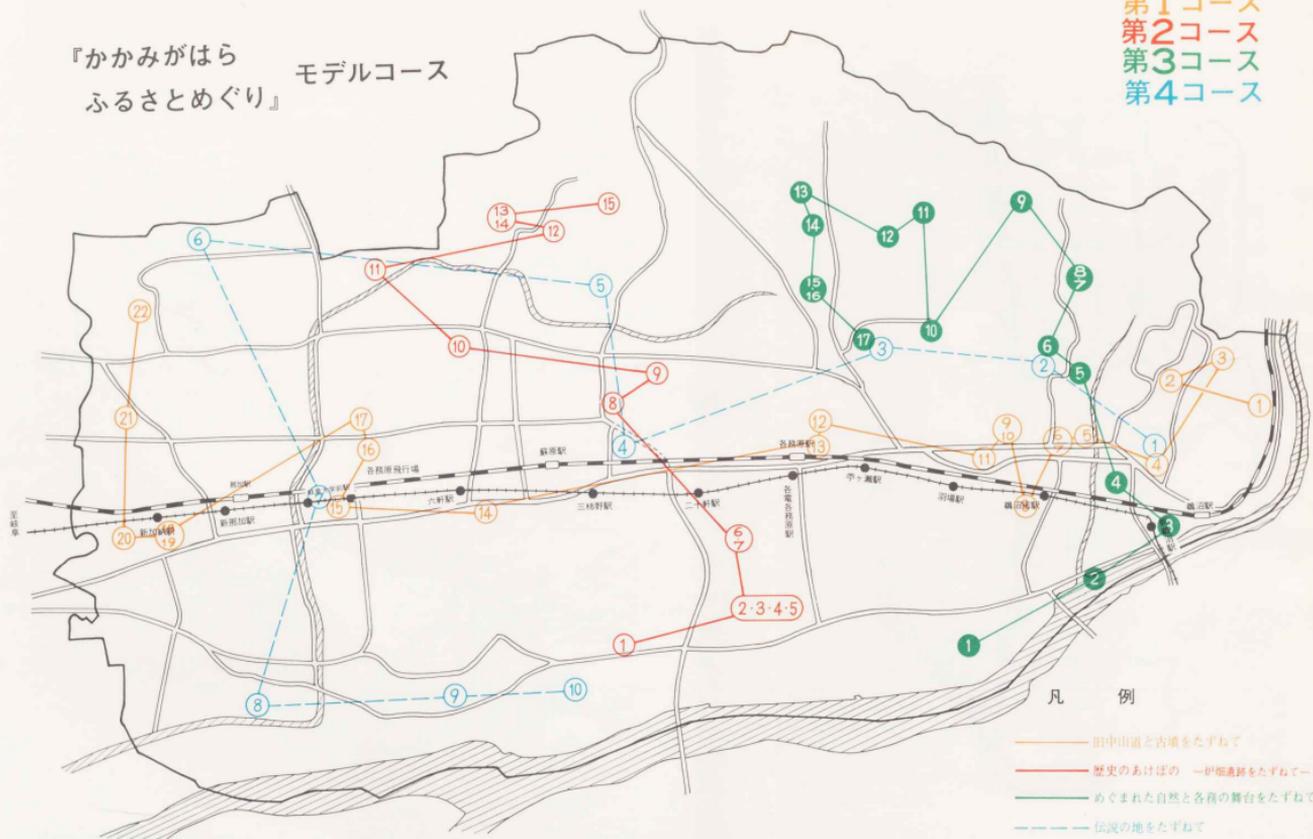


- 凡 例
- 旧中山道と古墳をたずねて
 - 歴史のあけぼの 一がね遺跡をたずねて
 - めぐまれた自然と各務の舞台をたずねて
 - - - 伝説の地をたずねて

飛鳥	55	祠古墳	81
第三コース		稲田山・云本古窯址群	82
めぐまれた自然と		各務の舞台	84
各務の舞台をたずねて		おがせ池	88
コース案内図	59	第四コース	
大伊木城	61	伝説の地をたずねて	
名勝木曾川	63	コース案内図	91
城山	64	金鳥塚のはなし	93
真墨田神社	65	大安寺の清泉	95
大安寺川	67	菅が瀬池の宝刀	97
新池	70	赤ほし山の立岩	100
大安寺	71	とうもろやっこ	103
車折神社	72	うばかふところ	107
日の出不動	74	ねずみ小僧といろは茶屋	109
車洞古窯群	76	西入坊の蛇骨	111
山中不動	77	甚六屋敷	114
寒洞池	79	あわずのちよろん	118

第1コース
第2コース
第3コース
第4コース

『かかみがはら
ふるさとめぐり』
モデルコース



各務原市を東西におとっている旧中山道は、江戸（東京）の板橋をふりだしに木曾（長野）をとって美濃（岐阜）に入り、近江（滋賀）の草津で東海道に合流しています。

市内の中山道すじにのこされていた松なみ木は、昭和十年代を中心にきりたおされ、いまではそのおかげもなくなってしまいました。また一里塚も新加納・六軒・山の前・鶴沼東岸の四か所にありましたが、いまでは鶴沼東岸（うとう峠）だけになりました。

昔の宿駅は伝馬の御（人）や荷をはこぶ馬）がしかれた時、美濃国全体で十六ありましたが、ここ鶴沼もその一つにふくまれていました。また新加納には小体本陣がおかれていました。古墳では、特に県下最大の円墳といわれる「衣笠塚古墳」や、前方後円墳である「坊の塚古墳」など、そのままのすがたで数多くのこされています。

私たちのまち各務原市の中山道そいには、このように先人がのこしてくれた数多くの文化財があらちらにありますが、ここではそれらをたずねて、先人のおもかげをしのぶとともに、地域の移りかわりをみていきたいと思います。

貞照寺

最初におとされるのは各務原市の東はし宝積寺町にある貞照寺です。ここは東に国鉄高山線が通り、それとならんで国道二十二号線がはしり、その東にはライン下りで有名な木曾川が流れています。北には高さ二百三十七メートルの陰平山がそ



門 王 仁 寺 照 貞

びえ、その下に高山線の第一トンネルがあり、西には新鶴沼台の団地が見えます。貞照寺は、国道から北へ五十メートルほど入った静かな所に

あります。

この寺は、明治大正・昭和の三代にわたって名僧としてかつやくした川上貞奴が、昭和八年に建てたものです。



堂 本 寺 照 貞

この人は、子どものころから信仰のあついでした。養母の病気をなおすため、大山の成田不動尊に願をかけ、冷水をあびる行にはげみました。するとそのかいあつてか、養母の病気はたちまちなおってしまいました。そんなことがあったため貞奴はますます不動尊を深く信仰するようになり、そして寺を建てたいと思うようになり、年をとってからようやくその願いがかなって建て

られたのがこの貞照寺です。

しかし、そのころは新しい寺を建てることをみとめなかった時代でしたから、大変苦勞して寺をさがされました。やがて東京の南多摩郡にあった全休寺の寺鐘を鶴沼の宝積寺に移され、官庁の許可を得て、金剛山桃光院貞照寺という名にしたのが、昭和七年十月二十八日でありました。



貞照寺倉庫

その後本堂・鐘樓・仁王門・庫裡・御水舎・茶所・稲荷堂などを次々と建て、昭和八年十月二十八日に本尊不動明王をむかえられました。その後、昭和三十五年になって犬山成田山の末寺とな

りました。年をとってからの貞奴は、ますますほけの道につとめたということです。貞奴が使った品などは、倉庫に保存されています。

貞照寺の行事を調べ、それと宝積寺町の人々の生活とのかわりを考えてみよう。

貞照寺からとう峠へ行くには山道がありましたが、今では通る人もなく道も急でかわしいためなくなっていました。そこで貞照寺の西を北西に向けて新鶴沼台にぬけていくと、左手に池があらわれます。それが合戸池です。

この合戸池はため池として使われていたものと思われませんが、山の斜面にあり、見晴らしもよく昔中山道を通る旅人のつかれをいやす場所でもあ

ったと思われれます。今では住宅にかこまれ、静かに水をたたえています。

とう峠の一里塚

合戸池を左手に見ながらしばらく行くと、右手に山へむかう道が見えます。そこを入っていくととう峠の一里塚があります。

貝原益軒の「岐蘇路の記」によると、「とう峠は長坂ともいうとありますが、坂が長かったので長坂と呼んでいたのでしょう。むかしはこのとう峠を通り、とう峠を越えるとうこう側を乙坂といい、坂根町勝山へ



一里塚跡

と通じていました。が、今はもうその道はありません。このとう峠を登りつめるあたりに一里塚の土もりが残っています。

とう峠の一里塚付近



時に向かって左側の一基は徳頭型のもり土が完全に残っており、高さ二一メートル、直径十メートルあります。右側の一基は戦時中航空隊がバラックの兵舎を建てたため、南側面が一部けずりとられています。両方とも松や雑木が生い茂っていますが、このあたりは眺めもよく、ハイキング・コースとしてもたいへんよいところです。このような一里塚は、この他に各務山の前町と、蘇原六軒地内、那加

新加納にありましたが、現在は残っていません。

金縄塚古墳

うとう峠をあとにして南西に向かって坂をくだります。右手の住宅街がとぎればたけがあらわれきますと、そこに金縄塚古墳が見えてきます。

この鶴沼東町にある金縄塚古墳は、後に山があ



金縄塚古墳

り周囲は畑にかこまれ、鶴沼一帯を見わたせる高台にあります。塚は直径二十五メートル、高さ四・五メートルで、県史跡指定の衣笠塚古墳につ

ぐ規模をもってい

ます。古墳の中央

部は深さ二・六メ

ートル、直径十メ

ートルの円形で掘

り下げられており、

そこに目通り（目

の高さの部分）四

十センチメートルほどの木の生えているとこ

ろから、古墳がほりおこされた年代を物語

っています。これが造られた時代は古墳時代中期

のものでされています。

「農圃行記」(木の名まこと)によれば、「古墳を

発掘したところ金の細あり、朱も多く出、焼物の

蓋もあったが、金縄はだまらまらだけ、それ以後鳴

き声聞けば必ず幸せになるといわれた金色の鳥

掘り下げられたあとの石碑



も、鳴かなくなつた」と伝えられています。

写真でもわかるように、もり土のまわりにはいくつかのあなが掘られています。これは戦時中ここにさつまいもを入れるために掘られたものといわれています。現在も宅地づくりがすすめられ、いつこわされるかわかりなようです。

。この古墳は、どれくらい地位の人のものであったか考えてみよう。

※金縄塚古墳の伝説については、第四コース九十三ページに書いてあります。

中山道鶴沼宿

金縄塚古墳をあとにして中山道を西へ向うとまもなく鶴沼宿にいたります。

旅籠屋、八戸が中



本陣 桜井家の門

記録によると西

町八十八戸のうち

宿内は二十九戸で、

このうち七戸が上

旅籠屋、八戸が中

美濃国中山道三十一里(約百二十四キロメートル)の間には、十六の宿駅がありました。鶴沼宿はそのほぼ中央にあたります。鶴沼宿の町なみは西町で本陣・脇本陣はここにありま。本陣は桜井家。脇本陣は坂井家です。本陣とは大名や公家など身分の高い人がとまる旅籠で、脇本陣は本陣がさしつかえてとまれない時に使用するところ。鶴沼宿の町通りは幅が広く町なみもよく、中央には大安寺川からとり入れた用水を流しています。

旅籠屋、十四戸が百姓屋であるといわれています。旅籠屋とは一般の人々の宿屋ですが、宿内の総戸数に比べて旅籠屋が多いのは、この宿のほとんどが農業をかねた家が多かったからと思われる。現在の桜井家は、明治二十四年の濃尾大震災以降に大山瀬の魚住家ここに移されたもので、昔みられた庭半分と大きなもちの老木、尾張の殿様よりおくられた自然石の手洗い鉢がわずかに昔のおもかげを残しています。



鶴沼宿の面影をとどめる街通筋

江戸時代には大変にぎわったこの宿場も、明治以降すっかりさびれ、国鉄高山線・名鉄各務原線の開通に

ともない、中心は鶴沼駅付近にうつってしまいました。

芭蕉の句碑

中山道鶴沼宿を少し西へ行くと、右手に芭蕉の句碑がみられます。

「ふぐ汁も
喚へば喚せよ
菊の酒」

鶴沼宿にある芭蕉の句碑



をつとめる坂井家に泊っていたとき、主人のもとに応じてよんだものです。

「ふぐ汁も」の句碑は明治十五年（一八八二年）

ころまで坂井家にありましたが、その後よそへ移り句碑もこわれたので修理されました。しかし昭和四十年五月坂井家あとに塚をたて「ふぐ汁も」の句碑が復元（もと）の形のようにつくられることされるとともに、「要科紀行首途の地」の石碑も建てられ、芭蕉が鶴沼に立ちよった記念とされています。

。「おもしろうてやがて悲しき鴨舟かな」と歌
阜にちなんだ句がありますが、これを機会に
芭蕉の句をいくつか調べてみよう。

二宮古墳

芭蕉の句碑のすぐとなりには、二宮神社がありま
す。「鵜飼志願」という木には、二宮神社のこと

を次のように書いてあります。



「二宮神社、三
尺四面、後藤若狭
拜殿は長さ五間、
鳥居は高さ十二尺
五寸、開き八尺八
分、社地は、東西
二十一間南北二十
三間」（一間〓約
一・八メートル 一尺〓約三十センチメートル）
丘の上に建てられた神社ですが、これらも古
墳が築かれていた丘です。その古墳は現在口をあ
けているだけでなく、石室に通じる道もけずりと
られた形で残っています。内部の石室は大きく大
部分が見られます。副葬品（死者にそなえて古墳
に入れたもの）はわかっていません。

狐塚の石棺

中山道をあとにして南へ行きます。名鉄鶴沼宿駅をとり鶴沼第一小学校の西方約百メートルのところ、狐塚の石棺があります。

ここ鶴沼向畑にある狐塚は、各務原台地を東にのりた平地にあります。現在はそのおもかげを残



狐塚の石棺

してはいませんが直径八メートルほどの円墳と考えられています。これは石屋さんが古墳の石を買ってはりとろうとしたところ、石室が

ありそこに石棺が入っていました。石棺は長さが一・八メートル、幅〇・九メートル、深さ四十三・五センチメートルで、屋根形のふたをつけた家形の石棺です。

石室は残っていませんが、石材は木曾川対岸の善師野あたりでとれるもので、そこから運んで来たものと考えられます。現在は石も長い年月風雨にさらされたい分いなくなりました。

この石棺をもとに石室と円墳を想像して、むかしのすがたを書いてみよう。

衣裳塚古墳

中山道を西町から羽場町へ入るとまもなく右手に空安寺が見えます。その入口の隣にこんもりと

が土の中からでてきました。この鏡は三世紀の後半、中国(魏)から伝えられたものです。このことから考えてみると衣裳塚古墳も四世紀末ごろ築かれた古い塚のようです。

伝説ではこの古墳は坊の塚にまつられている人の衣裳をうめたものだと、衣裳塚は一升塚(一升は一・ハリツトル)むかし銀の小塚を一升うめたとかいわれていますが、古墳である以上そんなことは考えられません。衣裳塚古墳は近くにある坊の塚古墳とともに、千数百年前に鶴沼地方一帯を支配していた豪族の墓であることにはまちがいないでしょう。

空安寺

衣裳塚古墳のすぐ西に空安寺があります。この



衣裳塚古墳

墳中最大のもので、古墳の東方および南方の一部はけずりとられて寺院の境内となつていますが、その他のところは完全にもとのままで、掘りおこされたようすはありません。

この衣裳塚古墳の東どなりに、一輪山古墳という直径九メートルほどの小さな円墳があります。

今から四十数年前にこの古墳をくずして畑にした時、直径二〇・九センチメートルの三角縁神獸鏡



光雲山空安寺の門

安寺を建てられたといわれます。その後小伊木に寺が移され、天文三年（一五四四年）にこの羽場に再び移され現在にいたつているといわれます。

寺は真宗大谷派にぞくし光雲山空安寺といひます。縁起書によれば、むかし、長岡千左衛門という人がいて、その人の長男千次郎という人が十三才で出家（僧になる）し、本願寺第八代御門跡の蓮如上人の直弟子となつて諸国をまわるおともをされました。そのとき寺を建てるようにいわれ、京都市山科から御本尊阿弥陀如来の御絵像をうけて、文明十六年（一四八四年）に蘇原地内の寺島に空

この寺は今から約五百年前に建てられたわけですが、正面の本堂ができたのは約二百年前といわれます。境内もきれいにととのつており、いわれの深いお寺です。

坊の塚古墳

空安寺をあとして中山道をいに西へ向かい、羽場農協あたりから南へ入ると大きな小山がみえます。それが坊の塚古墳です。

この各務原台地の東のはしにある坊の塚は、前方後円墳としては県内でも大きい方で、全長八十九メートル、後円部の横はばは五十六メートル、高さ九・七メートル、前方部のはばは四十五メートル、高さ六・四メートルもあります。

もり土の後円部の北方にはばは十メートル以上

のほりのあとがそのころのおもかけをとどめています。後円部の中心あたり、深さ約一・五メートルのところには石室がありますが、今はほりおこされてはつきりしていません。ひかしは古墳のも

り土に円筒埴輪（土くずれをふせぐための土器）が立っていたといわれています。明治十九年と三十五年ごろの二回にわたつて調査がおこなわれ、勾玉・管玉・小玉・石のおなどがでてきたといわれますが、現在それらは伝えられていません。

この古墳について

ではこんな話があります。

ひかし、村人がこの塚をほりおこそうとしたところ、

くわきさが古墳の

ふたにあたり火花を発して、その飛火で付近の家が燃え上がり、おりからの強風で塚全体が焼けてしまったということです。

この古墳をつくらせた人はどんな人だったのだろうか。又農民はどんな気持で仕事をしたのでしょうか、考えてみよう。

八幡神社

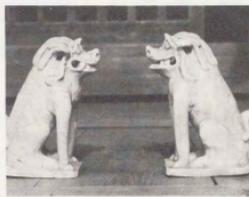
鶴沼中学校の前を西へ向かい約一キロメートル行くと山の前の八幡神社があります。とちゅうから道が細くこみ入っていて少しわかりにくいところですが、少し高いところに建てられていますので、目を上に向ければすぐ見つかります。

この八幡神社には、灰神狛犬があります。これは



全景の塚古墳の坊

焼物の立像で、高さ二十八センチ、前より尾まで二十センチ、開口閉口ともにこわれていません。頭上には角があり、頭の後毛はかたまでたれきがり前足を垂直にして立ち、後足をおりまげています。焼物の狛犬としてはめずらしいもので中国の影響をうけた古いもので、さまざまな年代ともあっています。



八幡神社の狛犬

台座は長方形で、背の部分に
のりま 豊州各務村八幡宮
げんく 元禄十四年巳八月十五日
 とあります。

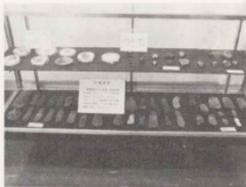
八幡神社をあとに南へ向かうと国道に出ます。さらに東に行くとも国道と国鉄高山線とが立体交差しているところがあります。国鉄各務原駅から東へ五百メートルほどの場所ですが、ここに山の前一里塚があったといわれています。しかし、これは昭和二十年六月二十二日のアメリカ軍の爆撃によって近くにできたあなをうめるために、もり土をくすしたので、今はそのあとはありません。

山の前一里塚をあとに国道を西に進むと左に自衛隊岐阜基地が見えてきます。さらにしばらく行くと道が急にせまくなりますが、そこから約五百メートルのところ小さな十字路があります。そこには北に一本、南に二本の松があったといわれる六軒の一里塚がありました。ここも今では小塚があるだけです。

歴史民俗資料館

市役所とユニーの間を北に進むと左手(西側)に各務原市保健文化会館があります。

この建物の二階の南側に、歴史民俗資料館があります。ここには、石器、土器などが時代別に展示されています。



市内から出土した石器

△先土器時代のもの
 V
 ここには、石器(土器を使う前のもの)が集めてあります。石器には、石をうらかいて作

ったものや、石をみがいて作ったものがあります。
 燧石遺跡(第三コース三十五頁をみてください)から出てきたものも見られます。

△縄文時代のもの

ここには、みがいた石器と土器があります。土器は、表面に縄目があり、色はかっ色のものが多く、厚くてもろい。形や文様は、年代が新しくなるほど複雑になります。燧石遺跡からも多く発見されています。

△弥生時代のもの

この土器は、縄文式土器に比べると、高温で焼かれ、

弥生式土器



底が小さくなっています。このかめは、ものをに
るために使われたものと思われまます。また、この時代
には、稲作もおこなわれ、金属器も使われています。

▲古墳時代のもの

古墳には、前方後円墳、円墳、方墳などがあり
ます。副葬品（死者にそえて古墳に入れたもの）に
は、鏡、玉、剣、よろい、かぶと、馬具などや、埴輪
（円筒はにわ、人物、動物や家など）があります。
ここには、朽山古墳から出土した鶏頭埴輪の頭部も
あります。

▲歴史時代のもの

市内須恵地区の古窯趾（古いかまのあと）から
出土したものが、集められています。特に、須恵器の
自然釉は、千度以上の高温で焼かれたため、燃料

をよこ切っではじめての十字路を東（右）に向か
うと、堆積が丘町の公園に出ます。その西がわの
道を北に進むと薬師寺に行きます。ここでは、い
くつかの角度から、この寺をながめてみましょう。

▲宗派と寺

この寺は法相宗で、奈良にある薬師寺の岐阜薬
師寺別院として、昭和十三年に建てられました。

その時は、講堂と庫裡（寺の台所）だけでした
が、二十六年に鐘楼（伊勢湾台風でたおれました）



薬師如来坐像（県重文）

三十九年
に本堂、
四十二年
に不動堂、
四十八年
に山門と

の灰が表面につい
て、釉薬（うわぐ
すり）をかけたよ
うになっています。
このほか、白鳳
時代のものとして、
山田寺や、平蔵寺
の境内から出たか
わらなどが展示されています。

自然釉のついた須恵器



薬師寺

市役所の北、飛行場前駅を北へ向かい、高山線

いう順で建てられました。

▲本尊と仏像

本尊の薬師如来は坐像（すわった形の仏像）で
「ぜんぜ薬師」とも呼ばれ、多くの人々に信仰さ
れています。本尊は高さは四十五センチメートル
のひのきの寄木造で、眼は玉眼、くちびるは朱色
でそら豆状のかたちをしており、顔ははげしてい
ますが、すみで書いたひげが残っています。全体に
おだやかな顔で、眼や口から、鎌倉時代の快慶の
流れをくむともいわれ、左手に薬童（やくどう）を持っていま
す。この本尊は、奈良の薬師寺に安置されていま
す。のを、昭和二十一年四月に移されたものです。
仏像の下内側には、道弁（みちべん）という坊さんが、貞和
二年（一三四年）に造ったと書かれています。



人々の信仰をひ
ろめるために、不
動明王のひとくお
こつているすがたを求
めて、昭和二十四
年四月に、奈良の
薬師寺より移され

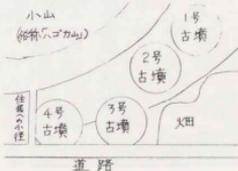
たもので、**足利時代**に造られたものといわれます。
その階層には、**弘法大師**と**不動明王**像がまつられ
ていますが、これは、**那加西野町**にあったのを、
ここに移したものです。

その他境内には、**保尊地藏尊**（幼児を守り育て
る。子の授け。乳もい。）や、水かけ地藏尊など
があります。

巾下古墳群

薬師寺から北へ
行くと、十六メー
トル道路と呼ばれ
る道に出ます。目
の前に小山（ふつ

巾下古墳群



う「ハゴカ山」が見えます。この山の南側から南
東側にかけて、四つの古墳がならんでいます。

一号古墳と二号古墳は南東にあり、東西十メー
トル、南北十メートルの大ききの円墳で、古墳時
代の後期のものと思われます。今では山林の中に
古墳石室の岩石といわれるものが残っているだけ
です。

三号古墳は、おかの南側にあり、東西二十メー
トル、南北十四メートル、高さ三・五メートルの
大ききの円墳で、古墳時代の後期のものです。円
墳の南側が道路でけずられていますが、その他は
ほとんど完全な形で残っています。

四号古墳は、おかの南側にあり、東西十四メー
トル、南北十四メートル、高さ三メートルの大き
きの円墳で、古墳時代後期のものです。円墳の西
の一部をこみちでけずられ、上には牛舎がありま
す。このように、ここでは四つの古墳がかたまっ
てつくられているのが一つの特色です。

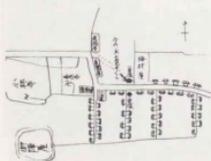
新加納小休本陣

市役所から那加の街をすきて、西へ行ったとこ

ろに、新加納町があります。この町のほぼ中央部
に、火の見やぐらがあります。この北側のあたり
に、小休本陣（梅村屋）があったといわれます。
新加納村は、中山道宿駅の加納宿と鶴沼宿の中
間にあり、宿駅ではありませんが、各務原台地の
西のはしにある交通の要所でありました。
道路にそつたところでは、少し商売をしていた
家もあり、旅人宿も数軒ありました。

加納と鶴沼の宿駅まで十六キロメートルもあつ
て、休けい所が
必要となつて宿
ができ、身分の
高い人の休けい
にあてるために、
小休本陣ができ
たのです。

各務郡新加納村略図

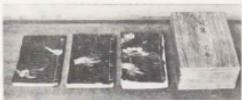


本陣は、宿駅に置かれるもので、小休本陣はとまれませんが、やがて武士たちの中にとまるものができ、利用されたようです。また、旗本坪内氏の接待の場所としても利用されたといわれます。

梅村屋のとなりには、一里塚（新加納）がありました。したが、明治以後とりかわされそのあとをあらわす標柱だけが南側にありますので、たしかめておきましょう。

少林寺

一里塚を西に進むと、医院の前の三き路に出ます。ここを左折しすぐ右折すると竹やぶがあります。これをすぎると、少林寺の稲荷堂の前に出ます。



公案（県重文）

た詩）のある頂相（神宗の高僧の肖像で、たて九五センチ、横四十六センチ）や、著書である公案（神宗の悟に関する大切なところを書いたもの）三巻、なくなる三日前に書かれたと伝えられる辞

世（死ぬ前に残す詩）などは、その代表的なものであります。

少林寺の門前には稲荷堂は、この寺の八世（八代）住職卍和尙の時に建てられ、それ以後百数十年たったいまでも、太く丸い柱や、美しい彫刻など、そのころのおもかげを伝えています。

本尊の稲荷大明神は、文化元年（一八〇四年）



頂相（市重文）

新加納の少林寺は、東陽英朝が開いた名高い寺です。東陽英朝は、臨済宗妙心寺派のすぐれた僧で、八百津町和知に生まれ後に京都の妙心寺、大徳寺などをへて、尾張の端架寺に移り、その後、美濃国内に多くの寺を開いた人です。そして、永正元年（一五〇四年）に七十七才でこの寺でなくなりしました。本堂のうらには、その墓所（墓）があります。

この寺には、東陽英朝に関する宝物が多く残っておりますが、恩宣圓師の讀一冊にそって書か

に京都の伏見稲荷から移して安置されたものです。この寺は、織田信長が賤川城を攻めたときの戦いで、寺の建物のほとんどが焼けてしまいました。その後、領主坪内氏が、領内の寺を調べて、少林寺の旧跡を盛んにし、代々の菩提寺（葬式や供養をする寺）となつてから、坪内家の墓や位牌や系図などが保存され、現在にいたっています。

境内にある坪内家の墓は、一族の代々の墓を集めたもので、旗本の墓としては代表的なものです。

また、墓所とあわせて、坪内氏のいわれをたずねる

旗本坪内家墓所（市史跡）



ことができます。

。この地方で坪内家は、どれだけの勢力を持っていたでしょう。か、お墓などから考えてみましょう。

手力雄神社



手力雄神社の鳥居

少林寺を出て、一里塚までもどり、北にある小山をめざして、新加納駅や高山線へてさらに進むと、渡道橋のある県道に出ます。これにそって北に進むと、左に墓地の見える

信号に出ます。これを西(左)に約二百メートル進むと、手力雄神社の鳥居が見えて来ます。次にあける、いくつかの点から、さぐりを入れてみましょう。

△由来について▽

この神社の神様は、手力雄命です。平安時代にまとめられた美濃国神名帳には、「真幣明神」と記されています。これは、神社後の山の中腹にある大岩を真幣岩といつて、とうとびがあがっていたことや、樹の標木に「真幣明神」と書かれていたことから、このようにいわれます。

この神社は、古くから那加地区の総氏神として、たつとびがあがられています。

△本殿と竜の彫刻▽
本殿は、流造りの椀皮葺(屋根をひの木の皮でふいたもの)で、寛政三年(一六七四年)に再建されており、三百年の風やあらしにたえ、ほとんどいたんでおりません。
この神殿には、たくさんの彫刻がありますが、「竜の雌雄」は、神殿の左右におかれてあり、色はあせていますが、するどい顔つきをしています。



手力雄神社本殿 (市重文)

つくった人は、神殿再建の木工棟梁樋口太兵衛であるといわれますが、はつきりしておりません。



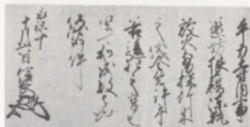
竜の雌雄 (市重文)



△織田信長禁制▽

この神社は、織田信長と深い関係があります。信長は、手力雄神社をうやまい、この神社に千三百ヘクタールの田畑を寄ふしています。その信長が出した禁制には、「糞妨狼籍、陣取、放火、竹木の切り採り」を禁じています。

永祿十年(一五六七年)は、信長が岐阜城をせ



織田信長禁制 (市重文)

めとった年であり、禁制は戦いによる被害を少なくして、みんなの心をおさめようとしたものです。

この禁制の文のはじめて、「手力寺」と書いてあるのは、手力雄神社の名にかんれんして、今も残っている文書の中で最も古い記録です。

これは、むかしは神様と仏様とを区別しなかったことによるのではないかと考えられます。

なお境内には、信長弓掛桜と呼ばれる桜の木があります。これは、岐阜城をせめた時に神社に戦いに勝つようについで、弓術をした時、その大枝に弓をかけたいわれのある木です。もとの木がか

れて、今は二代目であるともいわれます。

〈狛犬〉

この狛犬は、天正九年(一五八一年)と書かれた石造の

立像で、開口、閉口の両方ともに口を水平にしてあごをあげ、前足を垂直にして立ち、からだをななめにして後足をあげています。かみの毛は肩までたれさがり、丸くむねをつきだしていますので、全体にやわらかい曲線をみせています。これは、東大寺南大門の大狛犬と同じ流れをくむ様式ともいわれます。両方ともほとんどこわれておらず、像の高さは約四〇センチメートル、前より尾まで



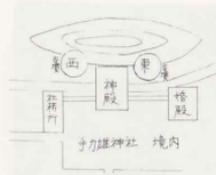
手力雄神社狛犬 (県重文)

約三五センチメートルあります。

〈手力雄神社境内古墳〉

この古墳は、丘を背に社殿をはきんで東西にあります。南に口を開いて石室を出しております。現在市内にある横穴式石室をもつ円墳のよい例です。

横穴式石室は、六世紀に入って全国に分布した古墳のつくりかたです。



手力雄神社東古墳(市史跡)

西古墳のもりつちは、直径一八メートル、高さ約四メートルで、石室は大きな岩石でくまれています。入

口からおくのかべまで一〇・五メートルで、これが石室と通路とにわかれています。通路の幅は一・五メートルで、高さが二・一メートルあります。東古墳のもりつちは、直径二〇メートル、高さ四メートルで、石室内部に土がくずれ落ちて測定ができません。入口の幅は、一・五メートルで、高さが二・二メートルあります。外形は、ほぼ完全な形で残っています。

手力雄神社内

には、他にも数基の古墳があります。これらの石室の中から、金環、銀環、勾玉(ほとんどは瑪瑙)でつくられて

手力雄神社西古墳 (市史跡)





手力雄神社東古墳（市史跡）

います）、
管玉（竹管）、
を切ったよ
うな形で、
長さ一セン
チメートル
ぐらいの大

きさで、直径五ミリメートルぐらいのものや、長さ三センチメートル、直径八ミリメートルぐらいのものがあり、ほとんどが碧玉製のものでできています）や、須恵器（古墳時代後半期だけの副葬品で、青灰色や灰藍色のもので、飲食用の容器です。それは、皿、高坏をはじめ、埴、甕、甗、平瓶、提瓶、甌などいろいろな形のもの）があります。これを死者の前にならべたのは、土器にも思われた飲食物をささげるためのものであったと思

われます。

このように、それぞれのひらは、みな神社を持っていました。神社はほとんど後に山をひかえ、前に田畑や平地のある場所になたてられております。神社がひらの生活の中心になっていて思われます。したがって、神社内の古墳はひらの祖先や、むらにかわりのある人のものと考えられます。

。神社境内には、多くの古墳がありました。どうして境内にたくさん造られたのか、考えしてみましょう。

向いております。

これは、四世紀ころにつくられたものと思われ

昭和三十二年ころ、小山のまわりがけずりとられ、小山の形が大きく変わりましたが、古墳の主要な部分は、ほぼ完全な姿で残っています。

この古墳の長さは約九十メートルで、後円部の横は約四十五メートル、高さ約七メートルあります。後円上部はたいらで、約十メートルの円形になっていきます。

前方部と後円部との間は、後円の中心から十九メートルの所で、後円部より約三・五メートル低くなっています。この部分のもりつちのははは最もせまく、約二十八メートルで、高さ約四メートルあります。

柄山古墳

手力雄神社を出て北に進み、境川を渡ったところで北の方に琴が丘団地が見えます。この団地の東のはしのすぐ向こうに小さな山があります。そこが、柄山古墳です。また、その向こうの山腹に尾崎団地も見えます。



柄山古墳（県史跡）

この古墳は、前方後円墳で、まわりに水田をめぐらした小さな山を利用し、その西のはしの上部につくられ、前方部は西を



柄山古墳出土鴨頭埴輪 (市重文)

約三・五メートルずつあったようです。

この古墳から鴨の頭部を形どった動物埴輪が見されています。この鴨頭埴輪は、頭から首の一部で、直径約十センチメートルほどのものです。

これは、市の歴史民俗資料館に展示してあります。

また、後円

部の後方には、

幅約二メートル

のほりがあり、後円部の

すそには、三だんの石が幅

まとめ

旧中山道と古墳をたずねて、東は貞照寺をスタートし、西は柄山古墳にいたるまで、各務原市を東西に見学しました。

このコースのテーマは「旧中山道と古墳をたずねて」でした。

全部でいくつの古墳を見て来ましたか。

それらの古墳には、どんなちがいが見られましたか。また、どんな共通点を見つけましたか。

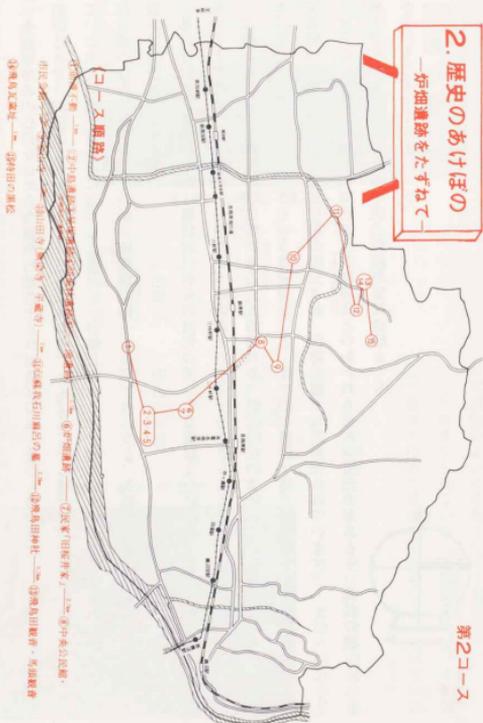
中山道のおもかげは、どこに、どんな形で残っていましたか。

これらをもう一度整理して、むかしの人々の生活といまの私たちの生活を比べてみましょう。

さらに、わたしたちのまち各務原市が発展しているうえに、何が一番大切なことを考えてみましょう。

2 歴史のあけぼの

— 舟楫集跡をたずねて —



第2コース

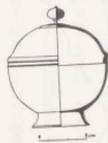
各務原市の中心部をしめる各務原台地が生まれ始めたのは、今からおよそ六、五百年も前のことで、**浜積世**（約百万〜一万年前の期間）とよばれている時代です。日本をおそって来た氷河時代が終わりに近づくころから、台地上には、草や木がしげり出し、石器をもった人間が住み始めます。その後、**沖積世**（約一万年間）に入ると、各務原台地は**縄文文化**の豊かな発源地となります。

それだけに、各務原市には原始時代からの祖先の残した貴重な文化財が数多くあります。そのひとつひとつから私たちの祖先のものの考え方や感じ方をとらえることができます。

このコースは、各務原の**明日香**である先土器時代や、縄文時代の遺跡をたずね、当時の人々の生活のようすをさぐるというものです。とくに、**炬燵遺跡**は縄文時代の中ごろを代表する県の史跡で、たてあな式住居が復元され、遺跡公園として保存されています。

さらに、**山田寺**、**飛鳥田神社**など大和朝廷とのかわりをもつ祖先の足あとを、現代の教育と文化のセンターである中央公民館や市民会館とくら

べながらたどってみましょう。



前渡不動



矢熊山全景

最初におと

ずれるのは、市の南はしにある前渡西町の矢熊山（八十八メートル）です。

この山の上有る**仏眼院**は「前渡のお不

動さま」として各所へ古くから土地の人たちに親しまれ、毎日おまいりする人でにぎわっています。また、山の下には、清流木曾川をはじめ**鶴尾**平野が見わ

たせ景色のよいところとしても有名です。ここにまつられている「**不動明王**」は、**下総国**（千葉県）にある成田山の分身だといわれています。

「**仏眼院縁起**」によると、江戸時代に前渡の領主**旗本坪内家**のけらいであった**山本軍八郎**の子ともである**秀之助**が眼病のため失明しました。そこで成田山にお祈りして治してもらいました。そのおん返しのためにお祈りの場をこ

前渡不動への登り口



に開いたのが始まりだと伝えられています。

明治二十四年には、京都から豊臣秀吉の祈願所である仏眼院を移しました。その後、多くの目の不自由な人が治ったといえます。それから、開運やくよげ、無病長生きをお祈りするお不動さまの名



を高め、現在は交通安全の守護仏としても信仰を集めています。また、八熊山のまん中あたりには、鎌倉時代から戦死者の供養塔

(二二二年)

の戦死者の供養塔(市史跡)が多数あります。

承久の変とは、頼朝が三代でたえたととき、後鳥羽上皇が政權を北条氏よりとりもどそうとして起きた戦いです。

その戦場の中心が摩訶漫(今の前渡)の瀬で、木曾川をはさんで数万の東軍と西軍の戦いがありました。上皇方は戦いに負け、上皇は、隠岐へ島流しになりました。

この戦いでなくなった人々をとりうために、あちこちにまつられていた五輪の供養塔が、八熊山に集められ、現在も土地の人によって、手あつく供養されているのです。

そのこけむした磐石は、山の上の方より発見されている刀ややりなどとともに、私たちに当時をしのばせてくれます。

炉畑周辺の遺跡



炉畑遺跡の周辺図

前渡不動から炉畑遺跡へ向かうには、八熊山のすぐ東を南北に走っている県道関、江南線に出て北へ進みます。

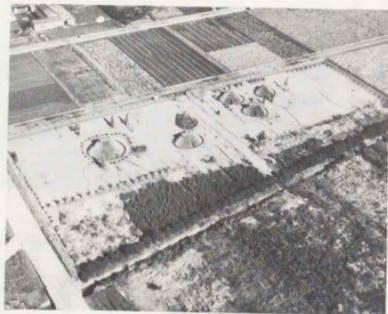
県道の西側には、航空自衛隊の基地がありますが、東側は畑や竹やぶやくり林になっており、おむかしのおもかげをいまでも残しています。

この一帯は、上図のように各務原台地の先土器時代(土器を使用する時代の前)や縄文時代の遺跡があちこちに分布しており、埋蔵文化財がふくまれているところとして知られています。

本市における先土器遺跡は、鶴沼の星塚、植野、嫁振、それに蘇原の六軒などにあり、ナイフ形石器がいままでに四点ほど発見されています。

星塚遺跡は、各務原台地の南はしにあり、現在は畑になっています。そこからは、縄文時代の中ごろの土器や、石のおもり、やしり、おの、きりなどがでてきました。

その中でも、ナイフ形石器は特別にめずらしいものです。



空から見た炉畑遺跡公園

炉畑遺跡



各務原台地が、原始時代の人々の生活していたことを物語る遺跡群を通りぬけながら、県道関・江南線を北へ進むと、炉畑遺跡を示す立て札があります。

そこを右へまがり、東へ約二百メートルほど行くと鶴沼三ツ池町の炉畑遺跡に着きます。

炉畑遺跡は、ただおむかしの遺跡としてだけ

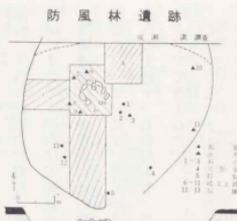


先土器時代の石器

先土器時代のものは、蘇原東門からの有古突頭器や、東島からの石やりなどがあります。

なお、このほかにも、さらにこの付近には、縄文遺跡がたくさんあります。

ナイフ形石器は、チャートのかけらに手を加えて作られたものです。これは、東京の茂呂で発見された茂呂形ナイフとよばれる石器と同じ形のもので、約一万七、八千年くらい前のものであると思われています。したがって、このナイフ形石器の発見によって、各務原台地には約二万年前から人間が住んでいたことがわかります。



のは防風林だけです。そこでは、住居跡と石垣跡がみつかりました。そのほか縄文時代の中ごろの土器もでてきています。

防風林から北へ約三百メートルほどいくと、加賀利E式土器がでてきた三ツ池遺跡があります。



さんあることも知られていません。先の遺跡のほかに、中島、防風林、三ツ池、西之野、二十軒などの遺跡があります。いままで発掘された



炉畑遺跡公園の入口

でなく縄文時代の住居をそのころのように復元し、遺跡公園に なっています。

炉畑遺跡は、昭和四十一年の土地改良事業で、表面の土をならしたところ、た くさんの土器のかけらがでてきました。さらによ 久年の秋には、畑のあとらしいものが発見されま した。このことがきっかけとなって、昭和四十三 年十月に発掘調査が始まりました。

この発掘では、地下にうずもれている住居跡を

さがしあてるためのトレンチ（みぞ）を作る段階 で、完全な形をした土器がでてきました。 地面の上の方からは、縄文時代の終わりのころ の土器が見つかり、下の方からは、縄文中ごろの 加曽利E式土器など多数の土器がでてきました。

炉畑遺跡の発掘地点と住居跡地点図



そこで、調査は昭和四十六年秋までの五回にわたって続けられました。

この結果、縄文時代の中ごろから終わりにかけての住居跡が十戸でてきました。また、かけらの土器をつなぎ合わせたところ、完全な形のものか

二十七個もできました。そのほか土器のかけらは、トラク一台分にもなりました。

そこで、この土地の字名である「野中炉畑杉」から炉畑だけをとって、

「炉畑遺跡」と名づけられたのです。 炉畑遺跡の近くには、いずみがわき出ており、小川も流れているので、水が得やすく、木の実も たくさんあり、けものも多かったです。自然に人が 人が住みやすかったと考えられます。

こうした生活のしやすい所には、自然に人々が 集まってきた、そこに住みついてひとつのムラを つくりまわす。炉畑遺跡のいくつかの住居のあとも 当時のそうしたムラのひとつであったのです。

この炉畑遺跡はちょうど各務原台地のほぼ中央 にあります。金あみのフェンスにかこまれた公園 内に足を入れると、いまから数千年も前にもどっ た気持ちになります。おおむかしの人たちが家の中 から、今にも顔をのぞかせそうな気がしてきま す。

縄文時代の住居は、洞くつや岩かげから、しだ



炉畑遺跡

いにたてあな式住居といわれるものになってきました。

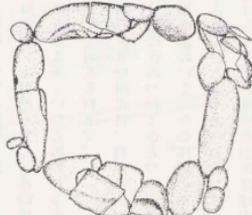
この住居は、地面を数十センチメートルほり下げ、そこへ柱のあなをほって柱を数本たて、その上にカヤの屋根をふいたものです。



たてあな式住居のほね組



住居跡のようす



第二住居跡の炉の実測図

住居の中へはたき火が持ちこまれ、床（ど）の中央部には、石でかこんだ炬がつけられています。また家のまわりには、雨水を防ぐためのみぞも作られていました。

なかでも、第一号住居跡は、ほかの住居跡にく

らべてとくに大きくくりっばなものでした。また、でてきたものの種類や数も大変に多かったことから、この家に住んでいた人は、このムラの支配者であったと思われる。

この住居のあとからたてあな式の中には、加曽利E式土器をはじめ、縄文時代の中ごろの特色をもった土器がたくさんありました。

なかでもめずらしいのは、キャリパー状深鉢（かぶり）で、下の写真のような特別な形をしており、全国でも数少ないものといわれています。

この土器の口もこのようは、竹べらやつめでひっかいてついたり、木にまいたなわを回わしてつけています。また、ひものようにのびたねん土をはりつけたりして、もようのつけ方にくふうをこ

炉畑式土器（高さ33.5cm）



らしています。土器のあつきはうすくて、色は赤かっ色をしています。

この深鉢は、住居跡から見つかっていることから、食料をたくわえるのに利用していたと思われる。

この炬畑だけの形やもようのつけ方から、この



吊手土器(高さ13.5cm)



黒曜石の釣針

土器は、「柄
杓式土器」と
名づけられま
した。

また、この
家からは、吊
手土器が完全
な形ででてき
ました。これ
はひもをかけ
てつるせるよ
うになってお
り、けもの油
やけむりの
ススもついて
いました。

そんなことからランプに使ったものと思われる。
そして、第一号住居跡が凹形であったのに対し
て、ほかのものは、すみがまるくなった長方形す
みまる方形)をしており、大きさも一号住居が七
メートルほどもあるのに、五・六メートルと小さ
く、あなも浅いものでした。

この遺跡全体から出てきたものは、土器のほか
に石で作ったやじり、おの、ほうちょう、おもり、
つりばり、さらなどがあります。

とくにつりばりの黒曜石は、岐阜県内にはなく、
近くでは長野県の和田峠でしかとれないもののな
で、長野県諏訪地方の人々といまきがかったもの
と考えられます。

土の中から出てきた石器で最も多かったのは、
五〜二十五グラムの石のおもりで、四百四十個も
ありました。近くの川で魚をとるのに使ったもの

と思われる。

また、土で作られた耳かざりや土偶(まじない
に使った土の人形)などのかけらから当時のおし
やれやまじないのようすをうかがうこともできます。

さらに、どんぐりの実が多くでてきたことは、
当時の人々は、食料のひとつとして、木の実を多
く食べていたことをうかがわせます。

これらのことから、縄文時代の人々は、自然の
中に生き、自然の中で育ちながらも、毎日の生活
用具が思ったほど多くあったことがわかります。

しかし、重い病気やけがをしたらまじないにた
よるしかないし、各務原のように海の無いところ
では塩が手に入りにくいので、生活は苦しかった
ようです。えものが無いときもあり、当時のかり
と自然のものをとってたべるくらしは、私たちが
想像するよりはるかに不安定であったと思われる。

炬燵遺跡は、柄のあとの焼け土を調べた結果、
紀元前二千七百年(いまから四千七百年ほど前)
ぐらい前の遺跡ということがわかり、昭和四十九
年に、県の史跡になりました。

なお、炬燵からでてきた土器や石器などは、市
保健文化会館(那加桜町)の中にある市歴史民俗
資料館に展示されていますので、ぜひ見学してく
ださい。

。縄文時代以前の先土器文化の遺跡や、その特
色を調べてみよう。

。縄文時代の文化の特色や、生活のようすをま
とめてみよう。

。縄文時代と、次の弥生時代は生活の上でど
んちがいがあるか調べてみよう。

民家「旧桜井家」

炬燵遺跡公園の北向かいに、市民俗資料館がある。



民家 旧桜井家

ります。

この建物は、すぐ近くにあった旧桜井家の民家で市の民俗文化財に指定されています。

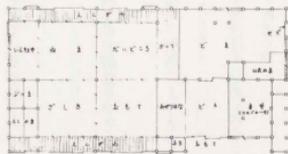
旧桜井家は、明治四年に建てられました。大震災でたおれ、明治三十二年に修理再築され、昭和五

十一年まで使用されてきたものを市がゆずりうけたものです。

この家は、美濃地方の古い農家の様式を示しており、間口が一八・七メートル、奥行が九・五メートルのわらぶきで、げん関のよこにはふろと便所がついています。

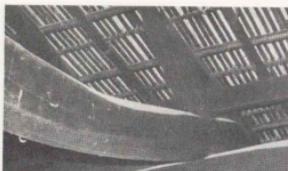
広い土間には、土をこねてつくったかまどや、水屋があり、いそがしい農家の人がはき物をぬがないで、自由に出入りできるよくなっています。また、げん関わきには、柱と柱をつなぐ太い木が横木がありますが、それは曲梁といわれる

民家の間取り図



もので、美濃地方の古い農家にみられる代表的なりっぱな造り方といわれています。

天じょうは、すの子、さおぶち、ねたの三種類からできており、さおぶち天じょうには、養蚕農



てんじょう井

家らしく暖房用のつつあながあり、台所には、いろいろが作られています。また、ざしきの床の間は三段になっており、上段には仏間が作られ、美濃地方としては

めずらしい造りといわれています。

このように家の造りのがんじょうきとともに、

各へやは使いみちによって造りがちがいが、素朴な中にも動きやすいようくふうされています。最近の建築ブームで、このような建て方の農家はなくなり、新しい家が多くなっているので、貴重な民家といえます。

展示されている生活用具

収蔵点数一覧表

分類	点数	分類	点数	分類	点数	分類	点数
ア 考	30	イ 楽	33	エ 事	7	イ 書	7
イ 衣	68	エ 手	6	エ 靴	0	イ 書	0
イ 食	18	エ 交	1	エ 刀	0	イ 書	0
エ 住	36	エ 通	4	エ 力	3	イ 書	0
オ 耕	19	エ 通	1	エ 力	0	イ 書	0
オ 山	2	エ 経	0	エ 文	5	イ 書	24
オ 漁	0	エ 社	0	エ 文	5	イ 書	5
オ 狩	0	エ 信	1	エ 文	15	イ 書	15
オ 真	2	エ 民	17	エ 文	2	イ 書	2
オ 漁	0	エ 民	16	エ 文	0	イ 書	0
オ 業	0	エ 人	28	エ 文	329	イ 書	329

中央公民館・市民会館



近代的でデラックスな両館(右が中央公民館・左が市民会館)

各務原市は、昭和三十八年に旧四町(那加・稲羽・鶴沼・蘇原)が合併してできました。産業の発展や住宅づくりが進み、人口も県下一のふえ方

を示してい

ます。

そのめざ

ましい成長のようすから「青年都市」ともよばれていま

す。

「人間と自然の調和した明るいまちづくり」を目標にいちじるしい発展をとげている本市は、とくに公共施設が整備され、人づくりに力を入れています。

原始の遺跡をあとにして、各務原市民の文化と学習活動の中心的な役割を果たしている中央公民館と市民会館へ、向かいます。

略 地 図



国道二十一号線、

国鉄高山本線を横切り、各務山を東にながめながら進むと、新しい住宅団地の間から近代的ないくつかの建物が目につきます。中央小学校、

結婚式場(中央公民館内3F)



視聴覚室(中央公民館内2F)

中央中学校、各務原警察署、東海中央病院にかこまれた両館は、ひととき目立つかば色の大きな建物です。

この二つの建物は、本市の生活、文化、

教養を高めることを目的としてつくられたもので、市の代表的な文化施設といえます。

この一帯は、赤坂山をけずりつつたもので、原中央町と名づけられています。中央公民館は昭和五十二年二月八日に、市民会館はすこしおくれ、十月二十七日の市制十五周年の記念式典に会館落成式が行われました。

全市民が待たのぞんでいた中央公民館は、左図にもあるように、鉄きん三階建てで、市民のために

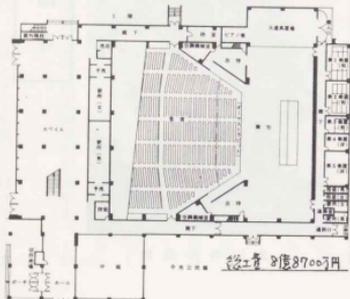
中央公民館のようす

鉄部	鉄部コンクリート3階建	
5畝	2,350万2千円	
1階	1,370.57㎡	ホールコート 82.42㎡
2階	633.85㎡	デント
3階	633.85㎡	合計
		2,638.27㎡

一 設 備

1階	料理教室 大会議室 視聴覚教室	料理講習・宗義教室に利用 講演会・研究会に利用 映画・スライド・音楽LL教室に利用
2階	図書室	成人・児童・生徒用図書約15,000冊準備、館内閲覧、貸出しもします
和室	茶室	和茶・生花・書村教室に利用
研修室	会議室	研究会・学級講演に利用 公民館運営委員会に利用
3階	結婚式場・美容着付室・特別書室・写真撮影室・和洋装覧室・配膳室	

市民会館の平面図



このどんちょうは、横十九メートル、たて九メートルで、数十色の糸で織りあげられています。この会館は、演劇・音楽・講演会・映画会や集会などいろいろな行事に使われ、まさに各務原市

子どもから老人までの社会教育や、市民文化の活動の場として、近代的設備をほどこした各種の会議室、学習室があります。館内には、市視聴覚ライブラリーも設けられ、視聴覚教室は、映画、スライド、音楽、^{英語}教室として利用でき、映画フィルム、ビデオテープは小・中学校や、社会教育の資料として貸出されています。図書室には、成人、子ども用として約一万冊の書物がとまのえられています。また、中央公民館結婚式場は、新生活運動として費用も安く、式のやり方も、神式でも仏式でもない市独自の公民館結婚式がとり入れられています。

市民会館は、中庭をはさんで中央公民館とホールにつながっています。

会館は、千二百八十八席の固定いすがあり、鉄

・舞台より観客席をみる



んちょうの「風景」は、豊かな自然につつまれた各務原市の朝焼けにうつつしだされた山々と、木曾川を朱色で生き生きと表わしたものです。

さん三階だてのりっぱな建物です。正面ホワ^{へが}イエの壁面「日輪」は各務原市に輝く太陽と人の輪が表現されています。

また、ステージのど

の文化の殿堂です。

利用者も年々ふえており、市民がここへこられやすくするためバス路線も整備されました。

S54.4.1 現在

使用区分	時間区分	全日			
		午前	午後	夜間	9時～21時
ホール	平日	20,000円	24,000円	30,000円	70,000円
	土曜日	20,000	29,000	36,000	80,000
	日祝祭日	24,000	29,000	36,000	85,000
	乗展(各家につき)	500	500	500	1,500
部室		午前、午後、夜間各1回につき	500円		

付属設備等 1件につき5,000円の範囲内で市長が別に定める額

それにつれて、この付近一帯は、めざましい発展を続けています。やがては、各務原市の中心のひとつになるものと思われまふ。

金山寺



金山寺の黒松

近代的な中央公民館、市民会館の北どなりの道路に立つと、東方三百メートルほどの所にこんもり木々のしげった小高い丘の上に金山寺（各務西町）があります。

同寺には、市の指定した文化財が二つあります。

遠く北海道にも渡って、仏の教えを広めて、「今（いま）釈迦」といわれた人です。

円空は、まずしい人々の生活に入りこみ、すすんで話をしたり、不幸な人や病める人をすくって歩いたといわれます。

円空は、十二万体の仏像彫刻を祈願し、一生を仏像づくりに努力しましたが、どんないきさつで同寺にたちよったかはわかっていません。

現在、各務原市では、円空仏は二体しか発見されていません。そのひとつである十一面観音像は本造で、完全な形で同寺に保存されています。

立像であるこの観音像は、丸木をたてに二分し、平らな部分を像のせとし、木の外側で丸味のある部分を像の正面とする円空独特の形式をとっています。

その仏像は、ナタとノミを使ってはったもので

ひとつは境内にある黒松二本（市天然記念物）で、ひとつは円空作の十一面観音像（市重要文化財）です。

黒松は、三本そびえています。写真左側の松は江戸時代の寛永三年（一六二六年）に金山寺が建てられた記念に植えられたもので、樹齢三百五十年といわれています。右側の松は二代目和尚が天和元年（一六八一）に植えられ樹齢三百年といわれています。まん中の松は、これら二本の松よりも少し新しいとのことです。

また同寺の十一面観音像はナタ彫りに特ちょうのある円空仏として有名です。

円空は、寛永五年（一六二八年）羽島の上中島村の農家に生まれ、若いときに家を出て、愛知県や伊吹山で修行したと伝えられています。そして名古屋市の荒子観音寺で、数百体の仏像をつくり

あるだけにぞびくの中にもあらあらしさと、力強さを感じさせます。

また、そのやさしい顔つきはだれもが親しみやすく、みんなに愛される仏像といえます。

円空仏

側面から（あつさ13cm）



正面から（高さ67cm、幅21cm）



山田寺



旧山田寺の塔心礎(塔の土台石)

- ・高さ 80cm
- ・中央に舍利あながみられます
- ・底面(長径 1.5m 短径 1.2m)

各務の金山寺の北側には、県道那加(宇ヶ瀬街道)が東西に走っています。歩いて三

十分ほど(バスは、太田線(新)馬場(蘇原)西へ進むと、蘇原古市場町の信号交差点に出ます。そこを横きり、南の路地に入ると旧山田寺の寺跡と考えられる蘇原(宇)馬場町につきます。

旧山田寺は、寺伝によると、大化五年(六四九年)に大化の改新で手がらのあった右大臣蘇我倉山田石川麻呂によつてはじめて建てられたといわれています。

この旧山田寺は、その後焼けてしまいました。が、寺のあったことを証明する礎石(建物の土台石)が多く残っており、付近からは、白鳳時代の特色をもつかわらが多く発見されています。

当時の有名な道路である東山道が、このあたりを通っていました。したがって、この道路を通じて、中央からいろいろな産物や文化が少しずつこの地方へも伝わってきたと思われます。

山田寺があったことは、そのころもとも進んだ文化であった仏教が、蘇原を中心に栄えていたことを物語っています。

旧山田寺の名どりをとどめるものとして、現在の山田寺本堂の北側および西側には、礎石群(県



塔心礎に納められていた舍利容器(高さ13cm,口径10.3cm)

史跡)があります。すこしはなれたところに、塔心礎(国重要文化財)があり、そのあから発見

されたと伝えられている舍利容器(国重要文化財)があります。

山田寺に残る礎石群



さらに付近から出てきた古がわりなどとともに、旧山田寺は歴史の上でも、貴重なものでもあります。

とくに、山田寺より東北約二百メートルの所にある無染寺をおとすると、大きな塔心礎があるのにおどろきます。

この塔心礎は、もとは、現在の位置より西の竹やぶの中にうずもれていたものをここに移したものです。塔心礎の上には、直径八十センチメートル、深き四七センチメートルの柱あながあり、そのまん中には、舍利あなが見られます。

現在、山田寺に保存されている銅製の舍利容器は、ふたの先につまみがあり、下には高台がついています。内部は緑銅色で、外側は灰藍色をしています。塔心礎のある場所や、舍利あなの大きさから、この舍利容器は、この塔心礎のあなに納められていたものと考えられます。

このような舍利信仰は、転運の死後、その火葬骨である仏舍利を供養するために、インドから中国、朝鮮をへて、飛鳥、白鳳期にはすでに日本に伝わっていました。奈良、平安時代にかけておびただしい数の仏舍利が唐から伝わったといわれて

います。

したがって、旧山田寺の舍利容器もインドから中国から伝わってきたものと、考えられます。

また、無染寺のうら手の畑より鷗庵瓦(市

鳥がやち

古かわらのひとつ瓦

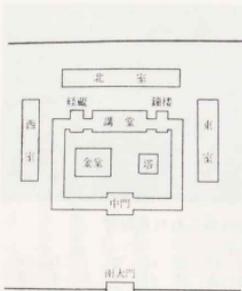


山田寺金堂の鷗尾瓦



重要文化財)の一部が発見され、現在、舍利容器とともに、山田寺に保管されています。

この鷗尾瓦は、金堂の大梁根のかざりであり、鳥の羽根を形どっています。その一部といっても、高さが五十七センチメートル、はばが三十センチメートルもあり、おとながやっと持ち上げるほどの重さがあることから、旧山田寺のお寺としての大きさが想像できます。しかし、塔と金堂がど



白鳳時代に流行した法起寺のようす

のような配置であったかは、いまのところはっきりしていません。

さらに、旧山田寺の付近からは、多くの古がわらが採集され、これらの資料からも白鳳時代の特色がわかります。なかでも大きな鷗尾瓦は、径が十七・五センチメートルもあり、その蓮の花のようである蓮花文は大変貴重なものです。これらの古がわらは、市歴史民俗資料館に展示されています。

平蔵寺は、山田寺の東方約八百メートルほどの蘇原熊田町にあります。

戦災により、旧本堂は焼け、現在は仮本堂が建てられているのですが、いまでは民家として使用されています。

その本堂の前にむかしのまま礎石が残っています。



平蔵寺のこわれた礎石

大きさは、徑九十センチメートルぐらいですが、いまはわれて半分だけが残っています。その中央部には、やはり深さ十センチメートルほどのくぼ

みがあります。この付近には、いくつかの同じような礎石がありました。が、岐阜や那加方面へ運び出され、いまではひとつしか残っていません。

この平蔵寺付近からも、徑十五センチメートル

ほどの礎石がでており、布目瓦などと合わせて、白鳳時代の特色を示しています。同時代に、東西に二つの寺院があったことは、大変興味深いものがあります。

さらに、山田寺とかかわりを求めて山田寺から北西の大島町へ行くくと、蘇我石川麻呂の墓

蘇我石川麻呂の墓



（市史跡）と伝えられる塚があります。水田の中に

小高い丘（おか）のような形をしている墓を土地の人たちは宮塚（みやづか）とよんで、石川麻呂の遺徳（いとく）をしのいでいます。

いい伝えによると、石川麻呂がこの地方へ（飛鳥）としてきていましたが、後に、大化の改新の手がらにより右大臣に出世しました。しかし、その後権力争いにやぶれて死に追いやられました。それを聞いた村人たちが深く悲しみ、死をおしんで遺骨を受けて帰り、ここにはうむつたものといわれています。

。 仏教が伝わったことが、文化や生活にどんな影響をあたえたか調べてみよう。

。 飛鳥文化、白鳳文化の特色を調べてみよう。

。 大化改新の前後の国内のようすや、改新の内容を調べてみよう。

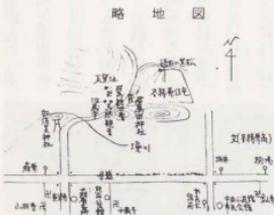
飛鳥

東山道そいの各務原台地に建てられていた山田寺の次は、このコース最後の蘇原の飛鳥をおとずれてみましょう。

加佐美神社の東を通り抜けながら、岐阜カントリークラブへの市道を北へ進みます。

ゆるやかな山道に入ると、なだらかな山すそに広がる家々は「飛鳥」とよばれるところです。

地名のよう



に、この一帯は大和の飛鳥地方の風景によく似ていることに気がつきます。

最近はその土地の開発で、山がけずられ住宅団地が造られ、まわりの緑がほとんど消えています。

そうした新しい飛鳥の姿を見ながら、ここに残るいくつ

かの歴史の足あとをたどってみましよう。

各務原

住宅団地の入り口にある小



蘇原の飛鳥

地方に住んでいた蘇我石川麻呂によって建てられていることなどからこの神社にまつられている人々がかつては大和朝廷の勢力と深いつながりをもっていただと想像できます。

延喜五年（九〇五年）の延喜式によると、美濃の三十九社が式内社とよばれていますが、飛鳥田神社、加佐美神社のほか、市内では、村園、村園真墨田、御井神社などがあります。数多い神社の中から位をつけて延喜式にとりあげられ、さらに神明帳に書き上げられるにはそれだけの理由があるはずで

そうした理由のひとつに大化の改新以前のムラの上に立つ小さなクニの姿、そしてそのクニグニをまとめて新しいクニをつくりながら全国統一を進めていく大和朝廷の支配のようすなどを思い浮かべることができる。

山の上に、市内の式内神社（国司が祭をつとめた神社）で、最も位の高かった飛鳥田神社があります。

現在は、団地にまわりをけずり取られ、

神社をとりまく樹木や草々はしげり、すっかりさびれています。おまわりする人もほとんどなく、昔のおもかげはありません。

しかし、すぐ南にある加佐美神社の位が飛鳥田神社について高いことや、山田寺が大和の飛鳥



さびれた正三位飛鳥田神社

飛鳥田神社と道路をはさんで、西側には飛鳥田観音があります。観音堂内には、江戸時代前期と思われる木造の観音立像が祭つてあります。土地の人のいい伝えによると、織田信長に焼かれた京都六角堂の観音像をここへお迎えしたといわれています。

その参道の入り口には、左右に馬頭観音と、地藏菩薩像があります。

江戸時代の人々は、神社や寺院のほかになさままな信仰のあとを

飛鳥田観音堂、このうら手が瓦葺



残っています。現在でも人の多く集まる所や人通りの多い所には、石で造られたこれらの石造遺物いそくせいぶつが各所にひっそり残されています。



飛鳥の馬頭観音

飛鳥の馬頭観音は、高さ七十六センチメートルのおだやかな合掌像で、頭の上には、馬頭がついています。馬頭観音信仰は、馬が農業や交通にきかんに使われる江戸時代中ごろより急に広まってきたようです。馬の繁殖をいの人々は、この観

音がすべての悪をはらほしてくれることを願ったものです。

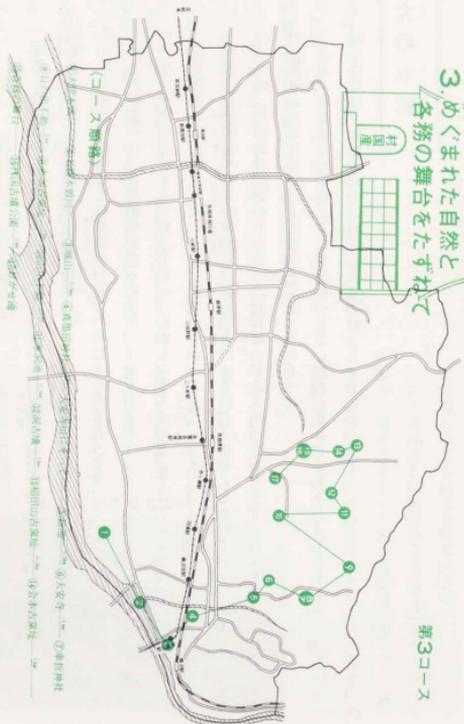
飛鳥田観音堂のうちの竹やぶになっている一帯は、飛鳥田瓦窯かま址として知られ、布目瓦ぬのめがわが多く見つかるところから、旧山田寺のかわらを焼いたかまのあとではないかといわれています。

また、飛鳥田神社の小山の北東のはしにそびえているのは、持田の黒松で、樹台三百年といわれ市の天然記念物になっています。



持田の黒松

3. めぐまれた自然と各務の舞台をたずねて



第3コース

市内を通る東海自然歩道のまわりには大むかしの遺跡が数多く見られます。美濃須衛古窯址群では、奈良時代から平安時代にかけて須恵器の生産がおこなわれました。これらのかまあとには今までに発掘のおこなわれたところもあります。

歩道の両側には、自然植物が見られます。ミカワバイケイソウ、シデコブシ、サギソウ、リンドウなどたくさん残っており、むかしながらの自然がたまたれています。

目を周囲の農村にむけましょう。時代がさがって近世になりますと、郷土の農村文化を代表する歌舞伎や狂言の興行が、村の祭礼のときに盛大におこなわれました。各務には、当時（江戸時代のおわりごろ）の農村舞台が今も残っております。今も毎年十月の村国神社の祭礼には、子ども歌舞伎がおこなわれます。

さあ、みなさん、このような興味のつけない東海自然歩道を歩き、少しなりとも、当時の空気に、直接はだてふれてみようではありませんか。

大伊木城

最初におとずれるのは、鶺鴒でも南西部にあり、木曽川に面している大伊木城です。

鶺鴒第一小学校の西がわの道路を南へ行きますと、山が目前にせまってきました。「むかしに比べてたいへん道路がよくなった」と、土地の人が話してくれました。

山のみもとの北西部には、大きな配水池が作られています。近くに多くの住宅ができたからでしょう。

この山頂に築かれていたのが大伊木城です。永禄八年（一五六五年）信長が美濃攻めのとき城を築いたといいますが、別の話では、池田信輔の家臣、伊木清兵衛忠次が、その後、頂上に城を構え

たのであるとも伝えられています。

この城あとは明治のころまでは東西十一メートル、南北八メートル余りの石垣が残っていましたが、今は四すみに四角の石がおかれ、真中に丸い石があつて当時のおもかけを残しているだけです。

近くの畑で仕事をしている六十才くらいの農家の方に話を聞きました。

「城のあったのは、一番高い頂で、東から二つ目の峠

城は岐阜城ぐ

山木伊から側沼





伊木山の地

「城へのぼるのは、どこからでしょうか。」
「そこに見える木のしげみへへこんだところから

つね道(けもの道)が

「東から攻めてくる敵を、ここでくいとめたん

「なぜ、ここに城が築かれたのでしょうか。」
「なげ、ここに城が築かれたのでしょうか。」

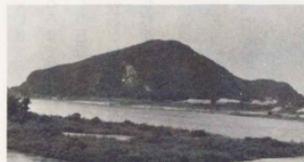
「東から攻めてくる敵を、ここでくいとめたん

や。木曾川もあるし、守ったり、見はったりするのにつごうがよかつたんやないかなあ。」

こんな話をかわしながら山頂を見あげますと、当時のおもかげが浮かんできます。大ぜいの足軽、よろい身をかけたた騎馬武者などが、この山をのぼりおりしたことでしょう。多分、大きな建築物も、そここに建

てられていたことと思えます。

大伊木城は南側に木曾川があり、尾張地方一帯を見とおすことができただけです。東の方には、大山城・鶴沼城を、西の方には、はるかに



大伊木山から見た山側

いなば(やまもと)稲葉山城(いまの岐阜城)をながめることのできる重要な所であったのです。こんなことを考えながら、次の名勝木曾川へむかいました。

名勝木曾川



犬山頭首工

大伊木城をあとに東に進みますと頭首工北側の十字路につきます。その先五十メートルのところに、国定公園及び東海自然歩道の標識がたてられています。標識をじっくりながめますと、このあたりを一目で知ることができ

ます。とくに、これから歩こうとするコースがよくわかります。ここ鶴沼地区と犬山市の間を流れる木曾川は、大小さまざまな岩や水の流れの変化がはげしく、ライン川に似ているところから日本ラインと呼んでいます。

昭和六年に文部大臣から国の名勝地に指定されました。

また、この一帯は、飛騨木曾川国定公園の指定もうけています。対岸には、国宝犬山城を望むことができ、夕暮富士(伊木山)

標識 道の自然公園 東国





名勝記念碑

空と山と水の色がみごとにとけあい、自然の美しさを表わしています。これらの指定の記念碑は、犬山橋の北端、城山のはとりに道路にそってたてられています。

この景勝地を見ようと全国から観光客が集まります。犬山うかいの盛んなころは、遊覧船がどつどつくり出し、鶴沼南町あたりの旅館はたいそうはんじょうします。

このあたりの木曾川は、承久の變、織田信長の



一部が残っています。

真墨田神社

城山をあとに、国道四十一号線を北へすすみます。車の往來がはげしく、むかしのおもかげはありません。

美濃せめ、関ヶ原の戦のまくあけ等、歴史の上でも大切なところで、むかしから、数多くの武将たちが戦の中で、この景勝地をながめながらつかれをやすめたと思います。

犬山橋から見た旅館街



城山

名勝木曾川の記念碑のたてられているところから上を見ると城山です。ここでは全景がみられませんが、犬山橋を南にわたりますと城山全体がながめられます。

この城山は、志水城、石頭山とも呼ばれ、南は

国鉄高山本線をわたり、左(西)に折れると、真墨田神社に着きます。

正面鳥居の右側に「郷社村国真墨田神社」と書かれています。大むかしこのあたりを村国郷と呼んだからです。又、鳥居の左右には、この神社のために寄付した方の名前と金額をきざんだ碑が玉垣をつくっています。

鳥居をくぐりますと、いちよう、かしの大木が目に入ります。とくに、かしの大木には、神木としての御幣がかけられています。





神 木

本殿に進みます。拝殿には、いろいろな張り紙、置き物があり、神社の特色がよくわかります。一度、じっくりと読んだりながめてみてはどうでしょうか。

この神社は、お宮の位が金幣社きんぺいしやになっています。金幣社とは、岐阜県としてつけられた第一の位を示すものです。

祭神は、火明神ひあきのみこととなっています。また、村国神むらくにのみこと、金山彦命かみやまひこのみこと、彦火火出見命ひこほひでみのみことともいわれています。何

の神様かは、日本神話をひもといてみるとよくわかります。

小牧、長久手の戦を知っていますか。その時、鶴沼の有力者である船頭がしらの河村惣六かわむらおんろくは秀吉に協力したことから、馬五匹と川の特権を与えられます。その時、秀吉の書いた紙きれが神社の宝物となっています。惣六はこれを喜んで、現在のところ、神社を新しく造って移したといわれています。

境内にはいろいろな建物や碑などがあります。お宮にはつきもの神馬かみま、護国神社ごこくしんじや、日清日露戦争の記念碑、正一位稲荷大明神、相



拝 殿 の 内 部

撲の土俵等々、古くからその当物を語るものばかりです。

稲荷大明神の鳥居わきにはのぼりがたてられ、家内安全、地球平和……の文字が見られます。

さいごに、この神社の祭りは、以前は十月十五日でしたが、現在は十月の第三日曜におこなわれています。当日は境内に店が多く立ちならび、おおぜいの人々がどっとくりだします。

午後になると、もちなげが盛大におこなわれ、祭りも最高潮に達します。

又、神輿が町内を



真 墨 田 神 社 の 全 景

めぐる行事もおこなわれます。

この古い真墨田神社での約四十分がまたたく間にすぎました。次の大安寺川に向かって進みましょう。

。大伊木城から真墨田神社までを歩いたあと、当時をふりかえり、この地が歴史上たいへん重要なところであったことを考えてみよう。
。伊木山や城山にのぼった人は、まわりの地形を写生したり、写真にとったりして、むかしのようなすを思い浮かべてみましょう。

大安寺川

真墨田神社の西、約五百メートルのところに大安寺川が流れています。今はすいぶんりっぱな橋



濟北參道改修記念碑



中山道轉沼宿説明板

山にそって五分も進みますと、濟北參道改修記念碑が道端にたてられています。その説明が碑の裏側に細かくびっしりと書きまわっています。碑の足もとには、記念碑を作

にまのつ
道はたに見られる地藏堂

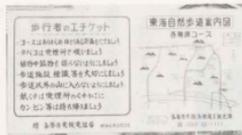


った当時のさくがん機(くわ)のあとでしようか、いくつもの丸い穴(あな)の跡が残っています。このあたりは、ゆるい坂道になっています。ひかしはでこぼこ道だったでしょう。今は西側の丘の上に松ヶ丘団地(まつのかみ)も開かれたので、道もよくなりました。



沿道に
舗された山道

中山道鶴沼宿の説明板が立てられています。一回読んでから進みましょう。



東海自然歩道案内図



中山道、大安寺川の交差点

がいくつもかけられています。葉飾櫓、鳥居、木橋などをわたって西側を北へ進みます。中山道と大安寺川の交わった地点に立ちどまりますと、いくつもの立て札が目につきます。川に眼を移すと、きれいな流れには、たくさんの小魚の泳ぎまわりますが、見られ、むかしながらのふるさとを感じさせます。ここから、川にそって

上流へは、特に歩くとよいでしょう。

さらに北にむかって進みますと、西側には大きな古墳、団地の高台などがみえてきます。間もなく分れ道になりますが、ここにあるのが弘法堂です。いろんな立て札や道しるべなどが見られます。ここで、ちょうど木曾川から二キロメートル、三十分、日ノ出不動までの半分にあたります。

道を左にとりましますと、

大安寺川の流れ



社動
折乃出
車日
道しるべ
(分れ道)



ひっそりたゞむむ水神の碑

反対に東側は、むかしながらのようすをよく残しています。道のわきに見られた地藏堂には、今も花や水がそなえられています。周間は、たいへん静かです。時折、ハイキングする人にも出あいます。

地藏堂から少し進みますと、右の山すそに小さな石碑が建てられています。よく気をつけないと、知らずに通り過ぎてしまいます。石の表面には、水神ときさまれています。この地の人の水を少しでも大切にしようとするねがいが、むかしから続

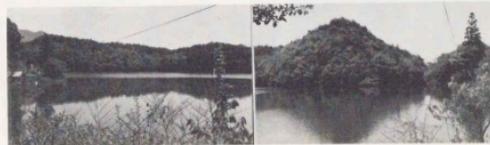
いているすがたを、まのあたりに見る思いがします。

新池

歩きつかれたところで新池がみえてきます。

この池を作る計画は、千八百七十年ごろ名古屋藩の家老であった旺庵姫雲がたてました。そのわけは、如雲が江戸幕府が終わりをとげると、多くの武士が職を失い生活に困ることを心配して「草

新池 全 景



薙隊」という三百名ばかりの農村隊をつくり、各務野を開いて水田をつくろうとしたからです。それには水が必要だということで、太田宿の禰田太郎八郎にたのみ、新池をつくりました。新池はつくられました。水が各務野まで流すことはできませんでしたが、けれども新池は、その後改築され、今日まで多くの人のくらしをささえてきました。池のはとりに、それらのことが書かれた碑が立てられ、休憩所も作られています。

大安寺

新池のすぐ前に大安寺が見られます。丘にありますので、参道がのぼり坂になっています。参道の手前には、いろいろな石地藏、南無阿弥陀仏の碑が見られます。

たちならぶお地藏さん



いわれの書かれた落慶香語



参道に入りますと、左側にはこの寺の建てられたいわれが書かれた碑、右側にはずらり並んだ信者の寄進の碑が立てられています。一度おとずれて、静けさにふれてみたいと思います。

大安寺を出て、次の目的地に向かいます。このあたりの道路はたいへんよくなり、自動車道、歩道とわかれているところもあります。途中左側に光生山、百度不動明王の碑が見られます。その奥

には信者の集会所もあります。右側には、このあたりから日乃出不動までところどころに休憩所があり、つかれをやすめることができます。

。大安寺川にそった地域のむかしのようすについて考えてみよう。

※ 大安寺の伝説については、第四コース九五五ページに書いてあります。

車折神社

間もなく車折神社が見えてきます。鳥居の横に「進学、就職、その他試験に志さす方々に」と書かれた立て札がたてられています。

鳥居をくぐり進みますと、「御石杖」の説明書が立てられ、健康と安眠を守ることができる



御石杖、御守等を持ち帰っていただき、合格したら川原等で拾った石一個をそえて神前に奉納すること、そのお返しする

石には「お札」を書くことなどを聞きました。

さて、ここで神社のあらましについてまとめてみましょう。祭神は清原頼業で平安時代後半にでた名高い学者です。清原家は代々学芸をもっておつかえした家でしたが、とりわけ頼業は秀才であつたと聞きます。

頼業の死後、御嵯峨天皇の御行列が墓前を通過

車折神社の全景



かれています。白龍寺、妙覚神のほりもたてられ、さらに進みますと、雲龍神社もありいろいろな参拝客のあることがわかります。事務所で係の方からいろいろな話を聞くことができました。

「どのあたりからの参拝客が多いでしょうか。」
「東は多治見、西は大垣、南は名古屋、北は関とすいぶん遠くからおまいりされる方がありますよ。」
「とくに、いつごろ多いでしょうか。」

「お正月から四月にかけては、たいへん多いのです。……から始まって、いろんな話を聞

のさいに御石杖の轆(牛車、馬車などの軸に渡して長く出した二本の棒)が折れたことから、車折大明神の神号をたまわつたとされていきます。

本殿まで進みます。途中から御礼のためにそなえた石が、山づみになっています。石には、いろいろな学校名が書かれ、祈願、合格した人の数におどろかされます。科学の進んだ世の中で生まれ育つてきた現在の人たちにも神の力は強い

か、あるいは、それはどまに受験競争がきびしいのかを考えると、車折神社をあとにし

お札の積み石



日之出不動

日の出不動は車折神社の北隣にあります。近づくにつれて、前に立てられた赤いほりがはつきり見えてきます。その数は多く、ちよつと見た



入口に見られるのほり

だけでは数えられません。寄進された人の住所が書かれ、一宮、名古屋、遠くは京都の文字まで見られます。

鳥居をくぐりますが、新しいので聞きますと最近一宮市の信者のグループからの寄進であるとのことでした。古い鳥居は本堂の前へ移動中でしたが、おまじりの人のたえなせいか、鳥居の下は通れるようになっていました。



鳥居 本堂
ならぶ

この日乃出不動は、美濃三不動の一つに数えられています。大安寺の笑彌和尚がこの地で修行され、不動尊に祈られたのが始まりとされています。境内にある「供養塔建立の願旨」にもくわしく書かれています。その一つに次の歌が紹介されています。

濟北に たすねきて見よ 日乃出籠
むすぶ心は すずしかるらん

この歌のいわれも、書かれています。

本堂前には、線香やろうそくのたえ間があります。せん。おまじりにこれらでよかったわけを聞いてみました。それによると、病気で困っている人が直ったこと、商売が繁盛しなおしたことなどでした。そのため東京方面からもこれらという

ことでした。

最近では年配者だけでなく若い人もおおぜいこれらること、多いときには三百人も団体がおり、時には三十人位こもり堂で宿泊されることもあります。宿泊があげますと、中には奥の院(追問不動)のおまじりにまわられる方もいます。

本堂の横には籠の行場(修行するところ)があります。夏はよいとしても、冬の行ともなるとたいへんです。籠にうたれ、一心ふらんにお祈りされるすがたには、頭がさがる思いがすると堂守さんは言っておられます。夜おそく修行する人もいます。

午前一時ごろ籠にうたれ、そのあとお経をあけておられる声が聞こえるとのこと。



籠にうたれた人たちの並んだそうり

修行した人たちの石碑



遠くの人のもずいぶん多く見られます。

毎月二十八日が命日になっています。又、月の第一日曜には、参拝者が多いことも聞きました。

堂守さんがまとめて、「つまるどころ、ここは修行道場のようなものです。この行は精神統一が一番です。いいかえるならば、もの判断がつくようになるのです」と、話されました。

籠の横手やうら手には、たくさんの碑がたてられています。また、不動の前の山にも数多く見られます。これらの碑は、ここで修行されなくなっ

。車折神社や日乃出不動が、なぜこのような土地につくられているか考えてみましょう。

車洞古窯址

日乃出不動を北へ進み多賀坂峠をこえると車洞古窯址につきます。その間、ここが各務原市であるのかと、ふしぎに思うくらい



立て札

の林も見られます。この窯跡は「美濃須古窯址群」の一つに入り、今から千五百年ほど前のものです。現在この地に立ちますと、周囲は緑一色で何もなく、山道一本が続いているだけです。しかしその当時は、付近一帯でさかんに須恵器が焼かれていたでしょう。そして遠くまで運ばれていたことと思います。

山はだをよく見ますと、ところどころに思はずんが土がみられます。当時の焼き土です。その間に小さな破片が顔を出しています。

この古窯址は、まだ十分に調査されていませんので、まだみつからない窯跡も相当の数にはいるものと考えられます。しかし、勝手に掘ることは文化財保護法できびしく禁止されています。不心得な考えをおこさないよう祈りながら山中不動へと向かいました。

ちらばる土器の破片



手にもった破片



車洞からの東海自然歩道は、ここで、西に向かい寒淵池に通じるコースと、五十メートルほど南にもどり、西に進み山中不動へ通じるコースとの二つに分かれます。

どちらの道も山道（林道）です。道の両側には、いろいろの落葉樹がしげり、つたや藤がからみついていています。道には、木の枝がおおいかぶさり、夏は緑の、冬は小枝のトンネルを作っています。



へ不動山中から洞車

このあたりは、境川が、ようやく川らしいすがたを見せるところです。川の兩岸は、土と砂と小石が入りまじった土のため、水の流れてけずりとられた赤茶け

た地はだを見えています。ところどころに、「防砂柵」の標識が立てられ、木をきったり、土をはったりするのを禁止し、土地を保護しています。

山中不動

車洞からの林道は、途中から広い道になりました。まだ、今は工事中ですが、完成すれば、すばらしい道になります。

山中不動への道は、このコースのほか、「おがせ池」から十分間ほどでも来ることのできるコースがあります。

この山中不動には、次のような伝説があります。今から千百年ぐらい前（八百六十年ごろ）に、九州の人が、諸国修行に出て、各地をまわっている間に年をとり、最後に住む土地として、この山の

岩あなを住居としていた。死ぬまぎわに、不動明王の石像を知り、だれにも知られないで死んでいった。

その後、大正時代のはじめに、愛知県一宮市の人が、この土地に来て、たまたまこの石像を見つけ、これを持ち帰ろうとしたが、その像を持つと、なぜか歩くことができず、そこに置いて帰った。その話を一宮市の人たちが聞き、その石像には、何かいわれがあるにちがいないと考え、その石像をみながらまつるようになった。

この様子を、地元「滝」部落の人たちも協力して、岩あなをそうじし、祠を建てました。それから現在まで、この山中不動は、ここを信こうする人と、洞部落の人たちが世話を続けています。特に七月二十七日には、部落の人みんなでおまつりします。

この山中不動がある場所は、山の北側の中腹であり、山水も多く、滝もあり、この滝にうたれて修行する人もいます。

参拝する人が、参道の両側に立てたのぼりには、各務原市・名古屋市・一宮市と書いたものが多くあり、北海道の札幌市・尼崎市など遠い所のものも見うけられ、信者が広い地域にまたがっていることがわかります。

春の樹木のみどりや桜の花の美しさ、夏の涼しさ、秋のもみじなど、

レクリエーションの場所としても親しまれています。

。「お不動さん」をさがし、いわれを調べてみよう。

山中不動全景



寒洞池

車洞からのもう一つのコース、北の方を通る東海自然歩道は、山中不動へ向かう道よりは少し細く、まがりくねっています。坂を上りきると、急に視界が広がります。そこが寒洞池です。

寒洞池は、各務の北山・御坊山の間に流れこむ

いくつかの谷川の水が集まり、自然の池を作っていました。今から百年ほど前に、近くの農民たちが、この池を「ため池」にして米作りの水を得るため、池の一番南に堤をつくり水をせき止め大きな池にしました。はじめ、この堤ははげがせまく低いものでしたが、下の方で水田が新し



寒洞池 北側の山すそはゴルフ場

く開かれるにつれて、高く、じょうぶなものにしてきました。

しかし、明治二十四年の「濃尾大地震」によって、この堤は、こわれてしまいました。農民は、自分の家もこわれましたが、米作りのためにすぐに力を合わせてこの堤をもとのようになりっぱに造りなおしました。

また、明治四十年の「大ひでり」では、この池の水もなくなってしまう農家の人

たちは池の下の方に行くつかの井戸を掘って、昼も夜も水をくみあげられるのを防ぎました。

その後、貯水量をふやすために、たびたび「池さらえ」をしたり、堤をしょうぶにしたりする工事を「行い、この池を大切に守っています

した。

つぎの文は、この池とは、直接関係はないのですが、この近くの部落の人たちが、水田に水を入れるとききまりです。このやくそくを読むと、そのころの農家の人たちが、どれほど水を大切にしていたかがわかります。

かぎりある谷水だ。みだりに畑を田にした
り、新しく田を開いたりすると、米を作る水
が不足するのは明らかだから、次のようなや
くそくをする。

。新しく開く田は、通帯田つうたいだで三日田さんじつだの二種類
とする。

。新しく通帯田を開く者は、一反約十アール
(約十アール)につき五円以上五十円以下のはんい
のお金を、その年の十二月二十日までに、役
員に出すこと。その次の年より、九年間は、

毎年三円以上六円以下のはんいで、十二月
二十日までに、役員に出すこと。

。金額のはんいは、役員が、実さいに、その
田へ見に行つて決めること。

。三日田は、毎年夏すまより二百十日までの間
に、引き続き三日間以上雨が降らない時は、
田に水を入れてはいけない。

。日でりが続いて水が不足してきたら、新し
く開いた田は、水を入れることを、えんり
よすること。

。新しく田を開く人を知った人は、そのこと
を役員に話すか、または、さし出し人の名
前を書かない手紙で、役員に知らせること。
(大正五年)

昭和になつてからも、このあたりは、大きな川
がないために、いつも水不足に苦しめられていま

す。昭和十三年に、県の補助で池を深くし、堤も
前よりじょうぶなものにしました。昭和二十三年
には、堤からの水をれを防ぐために、コンクリー
トでかためました。その後たびたび工事をして、
よりたくさん貯水できるように努力しています。
現在、この池の水でかんがいできる水田の面積は、
約八ヘクタールです。

また、この池の水は、洞部落の中の小さな水路
を通して、それぞれの家の近くを流れるように作
られ、農家の人が農
具や手足を洗ったり
するほか、火事の時
の消火用水にもなる
ようくふうしてあり
ます。

この池のなまえ



家の近くを通る水路

洞は、この池が、四方を高い山にかこまれてい
るため、日の出がおそく、日の入りも早く、特に
冬は寒さがきびしいためにつけられたといわれて
います。現在は、北側の山がゴルフ場になり、む
かしのような山の中の池の感じは少なくなってい
ます。

。あなたの家の近くにあるため池や用水路のき
まりを調べてみよう。

洞古墳

寒洞池を南に進むと洞部落です。ここに、「史
跡洞古墳」があります。

古墳がいくつか集まっているところを、古墳群
と呼んでいます。古墳群は、境川上流の北側に広
がる山のみもとや、おかななどに広く分布していま

す。

この古墳は、ほとんどが円墳で、古墳時代の後期のものです。

古墳 古墳 古墳 古墳 古墳 古墳 古墳 古墳 古墳 古墳



古墳時代の終りごろになると、古墳にまつられる人の地位がだんだん低くなり、また、まつられる人の範囲も広くなっていきます。それにつれて、古墳は小さくなり、二つの場所を集められ、農業にとって大切な水田地帯をさけ、山すそや丘などを利用して作られるようになります。

このころの古墳のつくりは、横穴式と呼ばれるものです。ここでは、樹木や土におおわれ、内部を見ることができませんが、鴨沼の二宮神社、那

のに、窯業（焼きもの、甕器を焼く）があります。その焼きがまのあったところを「窯跡」と呼んでいます。かまあとには、陶器やそのかけら、その灰やかまの形などが残っています。

平安時代の朝廷の文書（延喜式）には、美濃国の陶器の種類が全国一になっています。その美濃国の窯業の中心地が、各務原市の北の山のふもとにあり、この地域を「美濃須賀古窯址群」と呼んでいます。特に、現在須賀と呼ばれる地内の、稲田山、東丸山じごく跡、田端、東郷、南屋敷、寺山、会本にたくさんのかまあとが発見されています。その一つが、稲田山古窯址群です。ここで、三十センチくらいのかまあとが見つけられています。また、会本の八幡神社境内にあるのも有名です。

このあたりで、いつごろから陶器を焼きはじめ

加の手力雄神社の境内でその様子を知ることができます。

洞古墳群のはかに、この近くでは、おがせ池のまわりや須賀、船山などの山すそにもよく似た古墳群が見られましたが、土地の開発のために、だんだんこわされて、現在では、非常に少なくなっています。

古墳 古墳 古墳 古墳 古墳 古墳 古墳 古墳 古墳 古墳



この地域のむかしの人々のおもな産業が農業であったことはたしかですが、そのほかの産業として、現在ははっきりしためることのできるも

たのかは、はっきりしていません。

しかし、美濃地方の古墳から出てくる須恵器がこの土地で焼かれたものであると考えられることから、美濃国で最も古いやきもの産地であり、全国的にも古い地域であることはたしかです。発掘やむかしの文書によると一番きかんだったのは、奈良時代から平安時代だと考えられます。

いつごろまで、ここで焼かれていたかとはつきりませんが、須賀にある嘉永四年（一八五一年）に代官所へ出した文書の中に、「陶器所村」と書かれており、それより後は「須賀」と書かれていることから、江戸時代にも焼かされており、長い年月陶器を作っていたことがわ



かります。

このあたりに、こんなにたくさんかまを作ったわけは、陶器をつくる原料(土)と、それを焼く燃料(木材)を近くで手に入れることができたことと、地形も「のぼりがま」を作るのに、つごうよかったからだと考えられます。

「のぼりがま」は、土地の斜面を利用するので、尾崎団地の公園の中に、横型にして残してあります。

かまあとの発見は、古くからありましたが、特に、最近の林道工事や団地開発

によって発見されることが多く、土地を開発する場所にあるため、発見



発掘のようす

出土品

されても、すぐにこわされてしまうことが多いようです。

かまあとは、許しなしで堀ったり、陶器やそのかけらを持ち出すことは禁止され、大切に保護するように決められています。ひかしの人々のくらしの様子を知る重要な手がかりですから、大切にしたいものです。

。出土品を資料館で見ても、当時の人々の生活のようすを考えてみよう。

各務の舞台(村国座)

寒洞池から、一キロメートルほど南に進むと、小さな川に出ます。境川の上流です。その川にそって四百メートルほど西に進むと「村国神社」があり、その境内に「村国座」と呼ばれる「各務の

舞台」があります。この大きな木造の建物は、芝居をする劇場です。「各務の舞台」は、昭和四十九年に「国の重要民俗文化財に指定されました。

舞台づくりは、今からおよそ百十年ほど前の慶応二年(一八六六年)に、各務の庄屋であった長瀬八左衛門によって計画されました。

建築材料は、村内の天野山の木を使い、住民の労力奉仕によって建てようとしたのです。しかし、八左衛門の死や国の政治が不安定だったことなどで工事にかかるのがおくれ、明治六年(一八七三年)にようやくはじめられ、明治十年に完成しました。

この建物の大きさは、間口(横)約十六・五メートル、奥行(たて)約二十二メートル、高さは約九メートルです。

芝居をする舞台の広さは、幅十二・一メートル、奥行約十メートルあり、直径七・三メートルの円

形の「まわり舞台」になっており、舞台の下で、人の力によって回すようになっていきます。

舞台左手の「花道」は、はは一・三メートルもあり、一流の劇場と同じ広さです。この花道の地下は、楽屋に通じるトンネルになっています。

客席、舞台、楽屋、トンネルなど建物全体が、境川の川ぶちの自然の地形をたくみに利用し、くふうして造られています。

この建物の一つの特徴は、舞台と客席が、二つの建物の中に作られていることです。客席は、板ばりで、うしろの方はど高

各務の舞台



くなっています。

左右には、二階席も作られ、観客は全部で五、六百人が入れます。

客席から天井を見ると、とても大きな柱が組み合わされており、この建物の大きさを、作った時の苦勞を思い浮かべることが出来ます。また、そのころの各務の山には、こんな大きな木が育っていたことも知ることが出来ます。

そのころは、光をとるのに電燈はなくちようちんなどを使っていたので、窓から取り入れる光についてもずいぶんうまくふうされています。

この「各務の舞台」が、国の「民俗文化財」として大切にされるわけは、この建物をここに住んでいた農民が、



大きな柱の組み合わせ

ができたのです。

舞台の「こけらおとし」(落成式)は、完成後五年たつて行われています。明治政府の考えとも関係はあるのですが、やはり舞台の設備や道具を整えるための費用の面での苦勞もおくれた原因だといわれています。



芝居の上演

この「こけらおとし」では、各務村の農民が役者になり、道具係、照明係、会場係になって、三日間も毎日続けて上演しました。その十三日間とも大変多くの見物人がありました。いかにみんなが喜ぶ楽しみがいっしょうけんめい参加したかわかります。

自分たちで芝居(地芝居と呼んでいる)をするために、自分たちの力だけで作ったものだからです。この舞台をくわしく研究することによって、江戸時代のおわりごろの農村の人々の生活のちえや考え方を手がかりになるものだからです。

このような舞台は、そのころ日本の各地で建てられたのですが、現在では、このように完全な形で残っているのはほとんどありません。

今のように、テレビ・ラジオ・映画などという楽しみのなかった時代では、芝居が農民にとって一番の楽しみだったのです。地芝居は江戸時代から盛んでしたが、そのころは、芝居をする時はりん時にかんたんな小屋を作って舞台にし、観客は屋根のない野天で見物しました。雨の日でも、寒い冬でも安心して芝居が見れるようにとみんなが心を合わせたから、こんな大きな建物を作ること

建てられてから百年以上もの長い間、土地の人々によって守られ、利用されてきたこの舞台は、今でもみんなに親しまれています。毎年秋に行われる村国神社のおまつりには、各務区を三つのグループに分けた組によって順番を決め、小学生などによる芝居・おどりなどを上演し、多数の観客を集めています。

「各務の舞台」のある村国神社は、各務村史によれば、千二百年ほど前に、「村国男依」というこの地方の豪族が建てたということです。この豪族は、現在の各務原市東部と愛知県^{豊田}の^{豊田}要部の北部をおさめていました。この神社には、「天之火命」と「村国男依」の二体の神様がまつられています。

まつりは、毎年十月十五日です。秋の豊作を感謝する「秋まつり」です。まつりの奉仕は、舞台

で行われる芝居とセットになっており、三つの組の人たちが、毎年交代で行います。十四日・十五日の両日は、村の人たちが一か月以上練習した御神楽を神社に奉納します。

この神社の西側の山すそに「**柿原古墳公園**」があります。小さな円形古墳がいくつも並んでい



古墳公園

す。よく手入れされているので、古墳群の全体の様子を、くわしく見る事ができます。

。「舞台」を協力して作りあげた当時の農村の人々のくらしぶりを、「楽しみ」ということから考えてみよう。

「各務の舞台」から、古い家が並ぶ部落を通って東南に十分間はど歩くと大きな池が見えます。

おがせ池

「おがせ池」は、名鉄各務原線「おがせ」から北へ歩いて、約十分のところにあります。

この池のまわりは、約四キロメートルです。いくつかの伝説を持つ池です。春は池のまわりの桜ともみじ、夏は、池の中には、おがせ池、秋は紅葉、そして、池の中の数えきれない大小さまざまな鯉の名所であり



観光地としても有名です。

この池は、また、信ここの池にもなっています。池の中に建つ社殿には、竜王がまつられており、この神さまの信者もたくさん参拝します。

池の鯉は、この信ことうと結びついて、絶対にとっではいけないとされています。あの太平洋戦争の終りから敗戦にかけての食べ物全くなかった時でも、このいい伝えはかく守られました。参拝する人が拝殿から投げ与えるえさをうばいあう大きな、色とりどりの鯉がしぶきをあげる様子はすばらしいながめです。

この拝殿から、五十メートルほど北に行くと、小さな橋があり、耕地整理の記念碑が建っています。このあたりが、農家の人たちが作った堤です。この池は、伝説



おがせの鯉

・観光、信ここの池であるとともに、農民の大切な「ため池」なのです。

日でりが続き、水田の水が不足してくると、この池の水を落とすのです。この「おがせ池」の水を利用する田は、「池がかり」と呼ばれ、約五十ヘクタールもあります。

水不足の年の田植は、この池の水を落とす日に合わせて準備します。そして、池に近いうちから順番に下の方へと田植をしていきます。ですから、この「おがせ池」のせわをしているのは、各務の舞台のせわをしている人と同じ「各務区」の人たちです。

むかしは、日でりが続いて池の水がだんだん少なくなり鯉が死んだこともありましたが、このころでは田の耕地整理などで水の使い方にむだが多くなったので、鯉が死ぬほど池の水を落としてしま

うことはなくなりまして。

この池の北東に、岩はだを見た「天野山」(二百六十八メートル)があります。この山に降る雨が、おがせ池に流れこむのです。

このあたりは、境川の上流であるために、水が少なく、農民はいつも水不足に苦しみました。

日でりが続くと、農民たちは神社に「晴ごい」(雨を降らせてくださいと願うこと)をしました。

「雨ごい」をしている間は、晴天でもせんたく物を外にはさなかつたということです。それでも雨が降らないと、各務区の全部の家が長さ二メートル、直径三十センチメートルの「たいまつ」(トーチ)を作り、各部落ごとに集まって、たいこやかねをたいて、この天野山に登りました。夏の

太陽が西に沈むのを待って、かねの音をあいずに、たいまつに「せいに火をつけて「雨ごい」をし

した。

天野山の尾根^{おび}づたいに山全体をふちどって夜空をそめる火は、すばらしく美しく、そして、農民たちの水を求める強い願いとその努力をよく表わしていました。

ふだんは、みんなのレクリエーションの場所になっているこの池も、農民にとってはとても大切な「ため池」なので。

天野山とおがせ池

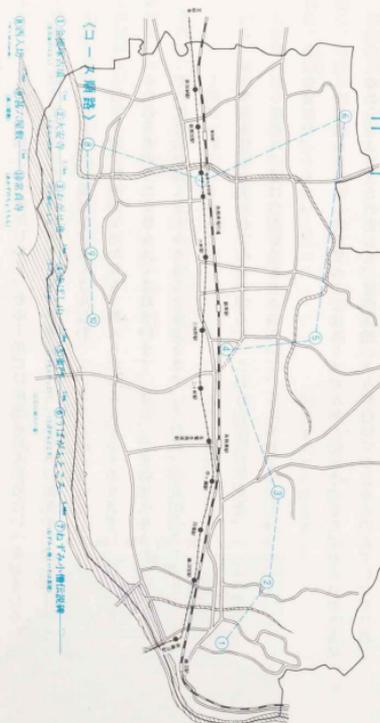


。「雨ごい」のようすを、お年寄りに聞いたりして調べてみよう。

※「おがせ池」の伝説は、第四コース九十七ページに書いてあります。

4. 伝説の地をたずねて

第4コース



(コース番号)

① 天野山 ② 天野山麓 ③ 天野山麓 ④ 天野山麓 ⑤ 天野山麓 ⑥ 天野山麓 ⑦ 天野山麓 ⑧ 天野山麓 ⑨ 天野山麓 ⑩ 天野山麓

岐阜県立岐阜女子商業高等学校

どの土地にも、むかしから、その土地だけに残されているたいへんおもしろい民話や伝説というものがありません。各務原市にも、私たちの祖先や先ばいの生活をしのばせるような説話が、たくさん伝わっています。

信とう的、精神的な面からも、教えられることが多くありますし、心を豊かにしてくれるものもたくさんふくまれています。また、歴史の中に生きた先人たちのすぐれた生活の知恵をくみとることもできます。それは、現代の私たちの生活にも深く結びついているからです。

ややもすると失われてしまいがちな、これら郷土の伝説を、一つでも多く正しく伝え、受けつがれることをねがって、ここにおさめ、しょうかいすることにしました。

ここにおさめたものがすべてではありませんが、伝説の地をたずねられたときにこれらをよりどころとして、その土地のありし日のすがたをしのんでいただければ幸いです。

金鳥塚のはなし

国鉄¹鵜沼駅を北にしばらくのぼると、道路の西側に、周囲が畑に囲まれ鵜沼一帯を見わたせる高台に、²金鳥塚古墳があります。

この塚には、鳴き声を聞けば必ず幸せになれるという、金色の鳥の話が伝えられています。

それは、ずっとむかしのことでした。ここ鵜沼の村は、川をはさんで二つに分けられ、沼に続いて田畑が広がっていました。

川のこちら側は、すぐ後ろに山がせり出している土地もやせており、せまい所に大ぜいの村人が貧しいくらしをしていました。

一方、川向どうの村では、よく肥えた田畑から

たくさん作物がとれて、村人たちは豊かなくらしをしていました。

ある時、この川をはさんで田畑の境のことから争いがおきました。

すきやくわをふりかざしての恐ろしい争いが、何日も何日も続きました。

村人にとって大

切な田畑は、ふみ

あらされ家は焼か

れ、大ぜいの人が、

傷ついたり死んだ

りました。

生き残った村の

人たちは、自分た

ちの土地を守るた

めに戦い、そして

金 鵜 塚 古 墳



大安寺には、蛇骨・香盒・茶籠・木盃・龍女解
胎物語絵巻物などが宝物として保存されています。
この寺のうらの山に、一年じゅうふえたり滅つ
たりしない清泉のわきでている所があります。

まだ大安寺の建っていない大むかしのことです。
笑堂和尚という人が、今の大安寺のある八木山の
岩の上（坐禪岩）で、すわっておられた時のこと
です。

ある夜、ふもとの方が美しい声で念仏を唱え
ながらのぼってくる者がいます。

見ると、若くてきれいなひすめです。和尚のす
わっておられる前にひざまずいたひすめは、

「私は、おがせ池に住む龍女です。むかしは、
里にでては美人となり、山に入っては山姥とな
り、谷川ではうわばみとなって、人間や牛や馬

山も谷も一度にゆれ動き、風や雨がげげしくなり
ました。そして、今まで和尚の前にいたひすめは
大蛇となって口から火をふいて空中へとびあがり
和尚のまわりをとりまきました。

一心に和尚がお経を唱え、それがおわると大蛇
は息絶えて、そのあとには、蛇骨だけがのこって
いました。

解脱のできたご恩にむくいるためにと、約束し
たッ清泉ヶは、その後どんな日での時でも、絶
えることなく今でもわきでています。

おがせ池の宝刀

池の周囲は、約四キロメートルあり、いろい
ろな伝説がたくさんある池です。

を食い殺してきました。でも今は、積み重ねて
きた罪の大きさに恐れ苦しんでいます。

どうか、和尚さんの念力（心をこめた力）で
私の罪をなくしてこの苦しみからのがれさせて
ください。と、真心こめてお願いしました。

和尚も、真心もって一心に道を求める熱心さに
心を動かされ、

「もとの蛇のす
がたにもどって、
私の前にあらわ
れないさ。そう
すれば、解脱（苦
しみからのがれ
自由になる）さ
せてあげます。」
と、いわれるや



光仁天皇宝龜年間（七七〇年代）一夜のうちに大
池がきたと伝えられ、童宮に通じ八大龍王が住んでい
たといわれています。池のほとりには「宝剣堂」が
あり、千年も生きていた大蛇からもらったという
宝刀が祭られています。
この宝刀についてこんな話が伝えられています。

むかし、おがせ
池の底に、大蛇が
住んでいて、とき
どき村里へでてき
ては、畑をあらし
家畜を食い殺して
いました。

ある年の夏のこ
とです。毎日毎日

おがせ池宝剣堂



たいへんな日でありが続いて、この池の水もかれかれになってしまいました。百姓の人たちは、とても困って毎日総出で雨乞いをしました。

夜には、たい松を両手に持って、山から池のまわりへと、歩きまわりました。

それでも、雨はすこしも降りませんでした。とうとう惣八郎という百姓頭が、だじな馬十頭と牛十頭を大蛇に食べさせようと、赤い着物を着せて、池のまん中へ連れ出していきました。

「蛇神さま。これを受けとってください。そのかわり、雨を、雨をください。」

と、一心になって祈りました。するとどうでしょう。十頭の馬がヒーンとはねあがり、後足をつっぱたまま、前足をバタバタさせたかと思うと、大つぶの雨が、ザアといっぺんに降りはじめました。

池の水は、見る見るうちにふえてうずを巻きだししました。

そして、あつと

いう間に、惣八郎もろとも沈んでしまいました。

たい松は消え、暗やみにかみなり

の光だけが、矢のように走りまわっていました。

まる三日間、降り続いたあとは、うそのように晴れわたりました。おがせの池も、なにこともなかったかのように、静かに水をたたえていました。それから、三年の月日が過ぎました。

百姓の人たちは、一日たって惣八郎のことを忘

れたものはいませんでした。

朝から百姓の人たちが、大ぜい集まってお坊さんを招き、惣八郎のためにお経をあげてもらっている時でした。

池の中から、だれやら顔をだして、こちらへひかかって泳いでくるではありませんか。

みんなびっくりりて、目をこすって

見つめていました。

「あっ、惣八郎だ。」

刀 室 の 出 現 宮 竜

「まがいなく惣八郎です。死んだとばかり思っていたのに、ふしぎなことがあるもので

す。

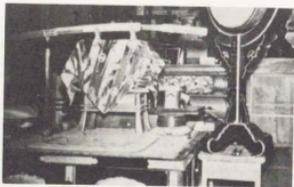
ぼかんとしているみんなの前で、惣八郎はこんな話をはじめました。

「おらあ、あの日、眼がくらみからだしがびれちまって、ぜんぜんおぼえがなくなつたまんま、池の奥底へひきずりこまれたんや。『いたい、いたい』と、うめく声に、ふつと気がつくくと、

なんとまあ。足もとに、頭をもたげたうらまわっている大蛇がいるのや。おらあ、たまげて声が出なんだ。にげようとしたけど、からだも

動かん。大蛇は、おらあのひぎへきて、「ここをさすってけれ。さすってけれ」と、ふくれあがった腹をむけるんや。こわごわさすってやっただ。なんども、なんども。

すると、大きな口をあけて、苦しげに太刀をはきだした。そして、やっとしずかになり、



「私は、この池に千年も住んでいる主だが、あの日でから、からだが悪弱よわしてしまった。むかし、ずいぶん村で悪事を重ねてきたので、なかなか死ぬれない。おまえが村へ帰ったら、坊さんになってな。み仏の力によって、私の解脱を導いてほしい。この太刀は、私のただひとつのたからだがさしあげる。いつまでもだいじにするとうい。私が死ぬばこの太刀は、きつと村を守ってくれるだろう。さあ、もっていけ」と、いうので、受けとるともうからだは浮きあがり、このとおりふじに帰ってこれたんや。」

そういうながら、りっぱな刀を見せました。その後、惣八郎は、坊さんとなり、東谷とうたにと改めました。それから、どんな日での時でも池の水はなくなることもなく、村人たちの田や畑をうるおしているということです。



立 岩

「だんなさん。ばたもちは、いかがですか。」
「いや、それより草もちを、おくれ。」
しばらくすると、青々したよもぎのにおいする草もちをもって女の人がきました。

六兵衛さんは、それをちよいとつまんで、口の中へ入れました。ところが、

「こ、こりゃあ。ペペッ、ペペッ……」
やわらかいはずの草もちは、口の中へ入れたたん、かたいわらになってしまったのです。

幸大安寺とおがせ池については、大安寺発行の「鶴沼名勝（童女ものがたり）」に、くわしく書かれています。

赤ぼし山の立岩たていわ

赤ぼし山に、木を切りにでかけた六兵衛べいさんは、いせよく山にひかっけていきました。

木を切るなや、草かりがまやにぎりめしを、かごに入れて背おっけていきました。

木を切りたおし、まきのたばをつくって、山をのはっていくと、丸たんぼをわらで囲った小さな家を見つけた。

丸たんぼの台にすわってこしをすえると、おくの方で男の人がもちをこねているのが見えしました。

気がつくくと、家はあとかたもなく消え、そのえ六兵衛さんのもってきた、にぎりめしまでなくなっていました。

ふと、前を見ると、きつねが一匹あつという間に、しげみの中にすがたをかくしてしまいました。びっくりした六兵衛さんは、息もたええに走って家へもどってきました。

それから、赤ぼし山では、べんとうをぬすまれたり畑のねぎなどもあらされるようになりました。

「赤ぼしやーまのおこんこは、べんとうぬすんで、どろまんじゅう。」

赤ぼしやーまのおこんこは、おにぎりぬすんで、わらまんじゅう。

おこんこ、おこんこ、こーんこん。」

子どもたちは、こんな歌をうたっていました。が、それからは、赤ぼし山にはけっして遊びにいか

くなりました。

ある日のことです。六兵衛さんが田んぼで稲か
りをしていると、弁けいを通りかかりました。お
どろいて見上げると、背も横のはばも六兵衛さん
の二倍もある大男です。六兵衛さんは、弁けいに
赤ほし山のきつねいじをたのみました。

二人が、赤ほし山にのぼると、大岩のそばに、
よろいかぶとに身をつつんだきむらいが、刀をぬ
いて弁けいをにらんで立っていました。

そのきむらいは、弁けいよりももっとからだが
大きく目はらんらんとかがやいています。弁けい
は旅すがたで刀も弓も矢も持っていない。

六兵衛さんは、おそろしくなつて松の木のうし
ろにかくれて、二人のようすを見守っていました。
きむらいをにらんでいた弁けいは、大岩のそばに
はえていたススキを一本ぬきとって、手に持ちま

した。そして大
岩にむかって、静
かに目をとじまし
た。

それから、ゆっ
くり目を開き、も
つていたススキで
「えいっ」

と、大岩めがけて
たたきつけました。

すると、たみ五まいぐらい合わせたほどの大
岩は、かみなりかと思うような、ガラガラッとい
う音をたてて、まっ二つにわれてしまいました。

「ススキのはで、岩をわるとはなんと強い人よ。」
きむらいは、そういったかと思うと、パッとす
がたをかくしてしまいました。

「おやっ、今のきむらいは。」

弁けいが、目をこらしてあたりを見まわすと、
五メートルぐらい先を、こそこそときつねがにげ
ていきます。

「あっぱは。このわしにはまいったな。」

弁けいはそういって、六兵衛さんに別れをつけ
鎌倉の方へ向かって歩いていきました。

このことがあってから、赤ほし山のきつねは、
村人や旅人には、けっしていたづらをしないうよ
うになりました。

現在の市民会館の南に、大きな赤ほし山があり
ました。

ところが、今ではほとんどんげずられて、ぐるり
とひとまわりできる小山だけになってしまいました
た。小山といってもほんとうに小さく、土が少し

空から見た赤ほし山の付近



もりあがっているようです。そしてその上に、
大岩が二にわれたまま立っています。

どうもんやつこ

殿様おんさまのお使いで、お金を持って歩いていた奴が
大金をなくし、殿様に切り殺されてしまいました。
その若者のたましいが、火の玉となつて橋の近
くをうろうろするとう。この土橋のことを土地
の人々は、火の玉橋かたましいというようになりました。
おがせ池へむかう街道の北側を、東から西へ静
かに流れている境川。火の玉橋は、その境川にか
かっています。

東門町への道は、今ではまっすぐになり田んぼ
の間をはしっています。

土橋はいつのまにかくずれ、コンクリートのりっぱな橋になり、その下で白サギが遊んでいます。この橋の北の方に、むかし五、六軒の家がありました。

その人たちは、屋根に使うかわらを焼いてくっていました。^{ササ}「須衛がわら」といって、とてもよいかわらで、そのころではお寺がお金持ちの家にしが使われないようなものでした。

遠い京の都や、尾張^{オウザウ}の方にもそのかわらは、おさめられるのです。

そうして、もうけた金の中から、上納金^{じやうなうきん}というものを殿様におさめなければなりません。

この蘇原の古市場に、庄屋^{じやうや}といって、上納金や百姓のつくった米を年貢として集めるところがありました。

ホタルの出はじめた夏のある日のことでした。

ことでした。

「軒一軒まわって、やっ集めた金は、かなりたくさん金になりました。」

「こんな大金、おとしたらえらいこっちゃ。死ぬまで働いたとて、わしらにやかせげん金じゃ」と、だいにふところふかくしまいこみました。

境川にかかる土橋のあたりでは、もうホタルがとびはじめていました。

「こらあかん。おそうなっりました。はようかえらな。まだしかられる。」

と、走るようにして土橋をわたり、いそいで帰っていきました。

すっかり暗くなって、庄屋へ帰った若者は、思わずドキョとして、ふところへ手をやりました。

「あっ、ない。えらいこっちゃ。上納金がない。ちゃん、ここへ入れといたんやに。」

その庄屋で働いていた一人の若者が、お使いとして、東門の部落へ上納金を集めにいきました。

若者は、この使いが一番いやな仕事でした。一枚一枚でいねいに土をねり、何日も日数や、手

まをかけてやっ焼きあげ、遠いところまで運んでいっても、金持ちや役人の言いなりの、少ない

金しかもらえないかわら焼きの人たちの苦勞を知っているからでした。

そんな人だちから、主人のいいつけとはいえ、また

今年もふやされた上納金を集めるのは、とてもつらい

火の玉橋より東門をのぞむ



まっ青になって、気がくらくたように、ふところをさぐる若者の前に、奥の方から出てきた庄屋

さまが、ぬーっと立ちました。「なんじゃと。集めた金がないやと。たわけめ。なくしたですむことやと思ってるのか。」

若者は、もうどうしたらよいかわかりません。ガタガタとふるえ

声もありません。にらみつけている庄屋さまの前で

ただ小さくなってすわりこみ、土間の

顔にすりつけるばかりでした。火

ちようど、この日庄屋さまの家へ

日庄屋さまの家へ



この上納金を受けとりに役人がきていました。

話を聞き、おこつてさしきから出てきた役人は、「なにつ、集めた上納金をおとしてなくしたというのか。このふんどきものめ。おおかた大金に目がくらんで、お前がぬすんで、どこぞにか

くしでもしたのであらう。ぬすんでおいて、なくしたふりをす

るとは、けし

らぬやつじゃ。」

と、いきなりこ

の刀をぬくと、

るえている若者に、

サッと切りつけ殺

してしまいました。

この若者のたま

しいが、「おれは、



尾崎団地をみる玉橋の火

ぬすんだんじやねえ。ぬすつとなんかじやねえ。落といたんじや。落といたとすりや、このあたりじゃが……」

と、今でもあの土橋のあたりを、ひっそりにさがしまわっているそうです。だれかが近づくと、スーッと消え、人が遠のくと、また見えたのです。

つこの間まで、子どもたちが、境川へホタルを、とりにいこうとすると、

「東門奴が出るで、一人で行くでない。」

「銭もっていくでないぞ。東門奴にとられるで。」と、きまつておとなの人からいわれたそうです。

東門から、西をみると、ずっとむこうに小高い山がみえ尾崎団地の家々が見えます。

うばがふところは、その山すその谷あいにあります。

うばがふところ

むかし、岐阜城に、若くてりりしい殿様が住んでいました。美しい奥方様をむかえて、とても幸せな毎日をおすごしていました。

二年ほどすぎた夏のこと、奥方様には、かわい

い赤子が生まれました。お世つぎができたよろこ

びにうらやうてんになっていきますと、数万の敵

が金華山にせめのはってきました。味方はひつ死

でたかいましたが、人数が少なく、とても勝負

目がありません。

てにげました。真夏の山の中をひつ死ににげているうちに、うばは奥方様たちとはぐれてしま

した。やがて鉄ぼうの首がして、奥方様と二人の家来が殺されてしまいました。

うばは、その場に立ちすくんでしまいました。赤子は、大きな口をあけて、今にもなきだす

です。うばは、あわてて乳ぶきをふくませました。ところが、乳はほとんど出てい

ませんので、すぐにはなしてしまいました。

「若君様は、なんとしても、わたしが

お守りせねば……」



碑の遠き「乳房が魂」にある記念碑



尾崎士郎の三好神社にある乳房

日もくれ、おなかをすかした赤子は、なくばかりです。そのうち

にととうとう、うばは乳は出なくなってしまう。した。何度も乳ぶきをしばってみましたが、少しずくも出ません。うばは、まっ暗な山の中を歩きまわりました。

つかはれて、ひざますいたとき、水の流れるような音がしました。水がわき出ていたのです。冷たくておいしい水でした。うばは、さっそく木の葉ですくって、赤子の口へ持っていきましました。すると、赤子がなきやましました。はら一ぱいになるとねむってしまいました。

出るようになると言われたしました。そして、いつの間にか、人々はここを「うばがふところ」と呼ぶようになったそうです。

尾崎小学校の北、尾崎北町の山すその谷川のはとりに、今ははこらが建っていて、子どもが生まれる前や後に、このあたりの人は、かならずここにお参りして、子育ての水をもらうようになりました。

今も遠くから来て、この水をくんで帰る人があそうです。

ねずみ小僧というは茶屋

今の岐阜大学農学部のうちあたりは、「かかみ野」といって、むかしは家一けんとしてない広い広

無事を祈りながら、赤子をねかせつけ、自分もその水をおなか一ぱいのみました。ふしぎなこと、乳が出るようになりました。ふところがぬれていたのです。うばは、急につかれがどつと出て、深いむりに落ちてしまいました。

朝早く、うばは、たき木をとりに来たじいさんに声をかけられて、目をさました。うばが、わけを話しますと、

「おお、お気のどくに。村のほうは残党がきびいで、村へおりとんきっては、あかんぞな。」

と言って、かくまってくることになりました。

こうして、うばは、村人の助けをうけながら、この山奥で、若君をりっぱに育てたということ

す。それ以来、ここから出る水を飲むと、よく乳が

い野原でした。

ある日ぐれのこと、野原の真ん中の一本道を、歩きつかれて今にもたおれそうなかっこうで、娘がひとり、とぼと歩いていました。何やら後ろからついてくるようで、足がすくんでしまいそうです。

しばらく歩き、やっこのことで明かりのついた一けん家を見つきました。そこは、おあつらえ向きのように、いろいろは茶屋々といって、小さな宿屋でした。

やれやれと思つて宿をこい、へやに案内されて、早めにねどこにはいったまではよかつたのですが、雨戸はガタガタ、ろう下はみしりみしり、あんだんの明かりがゆらゆら。それが、だんだん人影に見えてきます。こわくて、ふとんを頭から引っぱつていても、ねむることができません。

ちょうどとなりへのやに坊様がとまっていますので、助けをこうと、

「そりゃ、お気のどくなことじゃの。では、わしが、へやをかわってしんぜよう。」

と言われ、娘は安心したのか、旅のつかれが出てねひってしまいました。



「ねずみ小僧」の記念碑

ろいてしま
いました。
こしをぬか
してにげて
いきました。

ことがありました。そのどろぼうは、**ねずみ小僧**と言って、びんぼうな人たちに好かれていました。娘は、つかまった**ねずみ小僧**を見て、びっくりしてしまいました。ずっと前、**ねずみ小僧**で助けてもらった坊様にそっくりだったのです。

「そうじゃ。同じ人かもしれん。まぢがない。まぢがない。でもまあ、どうしたことやろ。」娘は、助けてもらったうれしさを、はつきりと思い出しました。

ねずみ小僧が江戸で、おしおきされたと聞いたあと、娘は「かかみ野」へやってきて、**ねずみ小僧**の近くに、**ねずみ小僧**のはかを見てやりました。

今も、各務原線「岐阜大学前」駅の北側に、そ

そのうち、坊様もねひってしまいました。どれほどすぎたころか、坊様はひねのへんが苦しくて目がさめました。すると、男が馬のりになっていました。坊様は、ふとんをはねのけるのといっしょに男をつきとばしてやりました。男はころがるようににげていきました。が、坊様の足にはかかいません。つかまえて、よく見ますと、宿屋の主人でした。**ねずみ小僧**は、宿の主人がぬすとをはたらく、たいへんな宿だったのです。

もちろん、それからは、**ねずみ小僧**はとりつぶされてしまいました。

娘と坊様は、あくる朝、わかれをおしみながら、べつべつのほうへ向けて旅立ちました。

そんなことがあってから、長い月日がたちました。娘は、江戸のあるおやしきにはう公していました。そして、そのおやしきにとろぼうが入った

の碑が残っています。

西入坊の蛇骨

下中屋町の河野西入坊の七代目の坊様を、行念ぎんねんといいました。情けの深い坊様で、みなのおしおきにたいへんたがっていました。

ある秋の日、その日は、お座がつとまり、村のしゅうが大せいお参りに来ていました。途中、後ろから、美しく髪をゆった、色白の、若い娘が、すうっと入って来て、すわってお参りをするのでした。坊様の説教が終わりますと、また、すうっと帰って行くのです。

二日目、三日目と、毎日、娘はお参りにやってきました。

行念は、毎日欠かさず参りに来てくれるこの娘

のことが気になりだし、そのわけをたずねますと、娘はいいました。

「ご院さん、わたしは、きょう限りの命でございます。生まれながら、生まれてから、人に迷惑ばかり



河野西入坊南門

かけてきました。わたしを見ると、みなものしゅうは、こわがったり、いやがったりします。でもいつもはずかしい思いばかりしてきました。どういうわけで、わたしは、こんな身になったのか、これは生まれる前に、何かとんでもない悪いことをしたにちがいない、そう思うようにな

さんのところに参るときだけ、こんなに美しい姿にしていたらいいのでございます。七日の間だけという約束で、きょうが約束の期限の七日目でございます。」

行念は、娘のかわいそうな話を聞いて、大きなため息をつきました。

娘は、まっ黒にすんだ目に涙を浮かべて、「ご院さん、ご院さんのおそばに、いつまでもおいていただきとうございます。」と、たのみます。

情け深い行念のこと、ころよく引き受けてやりました。娘は、すっかり安心して、にっこり笑い、

「わたしは、丑うしの刻くわ（午前二時ごろ）に、あなた様の御室で、おいとまをいただきとうございます。それで、多くの人が見ない間に、わたし

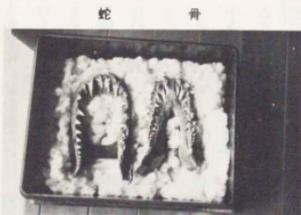
りました。それで、ご院さんにおすがりして、どうぞ極楽浄土へ参れますように、とことんのお話を聞かせてもらいたいと思ひまして、毎日、こうやって……。」

「それにしても、そんなに美しいがたをして、また、どうして……。」

と、わけがわからないので、行念がたずねますと、「はい、そのことでございますが、こうして、ご院さんの教えを受けに参るときだけ、こんなに美しいすがたになれるのでございます。いつもは、自分でもおどろくほどみにくいがたで、人にはこわがれたり、さらわれたりしております。ご院さんの前に、みにくいがたをお見せするのは罪の深いことでございます。それで、わたしの住んでおります腹池はらいけのそばの、春日かすがの神社にお願いしまして、命と引きかえに、ご院

のこの身のかたづけをしていただきとうございます。」と、いいました。

そこで、行念は、みんながねてしまっても、ひとりだけ起きていて、もうやがて丑うしの刻くわになるはずだと思っておりますと、何やら、ものすごい音がしました。



「ああ、こりや今、おいとまをもらうんだな。」と、ひとりごとを言い、そこで、念仏をとなえ、おつとめをすませ、先ほど音のしたほうへ行ってみますと、

おどろいたことに、

三メートルもある大きな蛇が死んでおりました。「ああ、あの娘は、春日神社うらの諏池に住んでいた大蛇の化身であったのか。かわいそうなことよ。生きているうちは、みんなにきらわれ、死んでからまで、人目をきけんならんとは、なんと、あわれなことよ。」



西入坊の本堂裏にある納骨塔

なおも念仏をとなえながら、行念は、大蛇をこにも包んで始末して、本堂のうらの納骨塔の下にうめてやりました。

行念のことですから、そのおりに、まるごとうめてし

まわずに、蛇の頭だけは、桐の箱におさめて、だいに供養するように伝えてきました。まるごとうめてしまうのは、いかにもかわいそうで、せめて頭の部分だけでも、そばにおいてやろうと思つたのです。

それが、今も西入坊に伝わっていて、上あごの下あごの骨と歯とが、そっくり残っています。上あごの長さは、二十センチメートルあまりもあり、鋭い歯が、いかにもどうもうな形をして並んでいます。

甚六屋敷

木曾川が、今の堤防よりも北を流れていたころのことです。後ろに三井山の続きの山がそびえて

いて、十けんほどの家が、山のわきにありました。そして、そこを山脇村とよみました。

山すそに、ねこのひたいほどの田や畑があるだけで、村の人たちの食べ物も、少しの米と、少しの野菜と、それに、時たま取れる木曾川の魚ぐらいでした。木曾川の川原がひろがっていましたが、大きな石ころがごろごろして、すきがぼうぼうしげっていましたが、耕作ができるようなところではありませんでした。

村の人たちは、みんな正直で、いい人ばかりでしたが、木曾川のはんらんでもあると、食うや食わすの生活をしなければならぬこともありました。

ある夏の日のことです。

雷鳴がとどろき、大つぶの雨が降りだしました。大風も吹きだしました。すると、ついさっきまで

静かに流れていた川が、ごろごろと荒れくるい、ものすごい勢いで流れだしました。

村の人たちは、水神様のおいかりだといひ、ひと晩中お祈りをしました。しかし、川は三日三晩、休みなしに荒れくるいました。

四日目の夜、村の人たちは、庄屋の家に集まり、「水神様のおいかりを解くには、三井山に登つて、天の神様にお願いするしかない。」

と、話し合いました。

甚六屋敷



話がきまります

と、さっそく、たくさんのお供え物を持って、三井山

の頂上に登り、大きなたいまつをもやして、天に向かかって、いっしょうけんめいにお祈りをしました。

すると、東の空から一すじの光がもれ、向こう岸の荒地の一所を、じかっと照りつけました。あたりが明るくなってきて、雨がやみ、大風も弱まってきました。しまいには、その風もやみ、川が静かな流れにもどりました。

村の人たちは、みんな大喜びでした。天の神様に、大きな声でお礼をいいながら、山を下り、村へ帰ってきました。

五日目の朝になりました。久しぶりに、静かで平和な村にもどりました。

しかし、ふしぎなことが起きていました。前の日にちょうど最初の光がさした向こう岸の荒地に小さな小屋が建てられていて、じいさんが一人、くわで荒地を切りひらいていました。じいさんの

でも名前が知りたくて、たずねますと、

「甚六といえますだ。」

と、名前だけは、はっきり答えました。

働きの者の甚六じいさん。荒地に住みついてから、三日で畑をつくり、一週間で田をつくってしまいました。そして、いもやとうもろこしや米を作り、ひとり者の甚六じいさんは、舟までつくって、その舟に米や野菜

いをいっぱいついで、村へ来ては、食べ物に困っている人に分けてやりました。

食べ物に困らないようになつた村の人たちは、



甚 六 大 権

いる小屋のあたりは、後光がさしているように見えます。

これまで見たこともないその光景に、村の人たちは、みんなびっくりしました。どこからやってきたものか、どうして荒地をたがやしているのか、そのわけが知りたくて、相談の結果、庄屋が代表



甚 六 裏 権

で、じいさんに会いにいきました。ところが、どこから来たとも、なぜこんな荒地をたがやすのかも、何も答えず、にやにや笑っているばかりでした。

最後に、どうし

だれいとうなく、甚六じいさんのことを、一天の神様のお使い」というようになりました。

それから、数年たちました。

その日は、朝から雲一つない、それはいい天気でした。庄屋が舟に乗り、村の人々のこれからの暮らしについて、甚六じいさんに相談に行きました。

庄屋は、夕べの村の寄り合いで話し合ったことを一つ一つ話しました。甚六じいさんがこの村に来たからは、食べる物には困らなくなったこと。しかし、いつまでも甚六じいさんにはたよってばかりいられません。そこで、甚六じいさんの知恵を借りようということになったというのを。

帰りぎわに、じいさんは、

「あした、来なはれ。」

と、いうなり、舟に乗って、どこかへ出かけ

てしまいました。

その夜は、暴風雨となり、村の前の川が、久しぶりに大荒れに荒れました。

そして、次の日。村の人たちは、びっくり。きのうまで、とうとうと流れていた川が、ずっと向こうのほうを流れていたからです。それに、手前の川のあとは、開こんしさえすれば田や畑になりそうな広い土地に変わっていました。

ふしぎなことに、甚六じいさんのすがたも、じいさんの小屋も、どこにも見当たりませんでした。

村の人たちは、

「やっぱり、神様のお使いやった。」

といって、甚六じいさんのたがやした向こう岸の土地を、みんなで守る相談をしました。そして、じいさんの住んでいた小屋のあたりを、〃甚六屋敷〃と呼ぶようになりました。

あこがれのままでした。

ところが、その竹宗には、もうすでにいなずけがありました。

ヤエと言って、前渡村の娘で、生まれる前から竹宗の嫁よめにと約束されていたそうです。

それが、顔に黒いあざがあって、その上、かわいそうに、片一方の足が、少し短かったといえます。竹宗は、一たん取り決められたこの約束を、武士の名にかけても守りとおさねば、と自分にい



前渡村の木曾川寺前常貞

きかせてきました。ところが、年ごろになったいまでは、やはり会うたびに、いや気がさして

ヤエは、そんなことも知らず、竹宗がしたわしくてしたわしくて、思いがつのるばかりでした。とある月のない、まっ暗やみの夜のことです。髪をゆい、新しい羽織はねおりをはおって、ヤエはそくさと常貞寺の前のあたりの堤に上がってきました。ちょうちんの明かりにうつつるヤエの顔は、おけしよのせいもあって、いつもとは違って、それは美しくかがやいて見えました。竹宗から、久しぶりにとどいた手紙に、水無月みなづき(陰曆六月)の十日、五つ半の刻に、堤の上で会おうと認めてあったのです。ヤエは、竹宗から、今夜はきつとやさしいことばをかけてもらえるに違いないと思って、胸むねをはずませ、堤を西へ西へと進んで行きました。しかし、竹宗の姿は、どこまで行っても見当たらず、上中屋を過ぎ、下中屋の前の池のはたも通りすぎ

あわすのちょうちん

前渡まわたりの常貞寺とねさだてらの前から、神蹟かみせきまでの木曾川堤防で、やみ夜に限って見られたというちょうちんの話です。しかし、そのちょうちんを持った人の正体を見とどけた者は、だれもいません。

時は、江戸時代の終わりがころ。前渡村のとなり、一人の侍ざむらいが住んでいました。竹宗たけむねといつて、男おとこはれのするほどにりっぱな顔の侍ざむらいでした。東より常貞寺を望む



て、とうとう神置の八幡神社の鎮守の森まで来てしまいました。

「早う、竹宗様に、会わせてください。」

と、一心にお祈りをしている時でした。カサカサと雑木がゆれ、草むらふむ足音がしたかと思うと、黒いふく面をした男が、ヤエの後ろに現われしました。ヤエが顔を上げたと同時に、サツと刀がふりおろされました。ヤエは、ぼったりたおれ、はたにおいてあったちようちゃんは、そのひょうしころがって、あかあかともえました。

どれほどの日があったでしょう。ヤエの親子、それに竹宗のすがたも見かけなくなりました。

ちようどそのころから、常貞寺の前の堤を、やみ夜に限って、明かりのついたちようちゃんだけが、足音とともに西のほうへ動いていくというわさがひろがり始めました。

あとがき

小学生、中学生のみなさんが、この本を手にしたらやお家の人々とたずねてくれることを思いながら書きました。

夏の暑さに汗をながしながら、何度も現地をたずね歩いて写真をとりました。

原こうをもつて、実さきにコースを歩いてみました。先祖の息吹が感じられました。

まだまだ書きたいことは、いっぱいありました。できるだけわかりやすくまとめました。

私たちのふる里各務原にも、こんなところがあったのか、こんなことが伝えられているのかと、見直していただけたら幸いです。

ぜひ、四つのコースをたずね、自分の目でたしかめてみてください。

神置にある八幡神社



そして、そのちようちゃんは、ヤエのもので、あの晩、竹宗に会いたくても会えなかったヤエの熱い思いが、ちようちゃんにもえているにがいないということになり、だれいとうなりま

く、＼あわすのちようちゃんというようになりました。

※くわしくは、各務原市小学校国語同好会編集の「かかみがはらのむかし話」をご覧ください。

編集委員（50音）

- 亀田 考包（那加中学校）
河田 忠（鷯沼中学校）
後藤 宏一（蘇原中学校）
左高 英夫（那加第三小学校）
辻 久夫（鷯沼中学校）
平嶋 賢了（稲羽中学校）
西垣 浩太郎（尾崎小学校）
西村 敏行（那加第二小学校）
前田 勝則（社会教育課）
片岡 宣仁（〃）
下野 昌良（社会教育課長）

発行所	各務原市教育委員会
発行年	昭和五十四年七月
発行部数	一〇〇部
発行部数	一〇〇部

発行所	各務原市教育委員会
発行年	昭和五十四年七月
発行部数	一〇〇部
発行部数	一〇〇部



昭和五十四年七月発行
 かみがはら ふるさとめぐり
 —文化財と公園の地をたずねて—
 発行 各務原市教育委員会
 各務原市那加町一六九
 印刷 御木村印刷
 〇五四二九二〇二

宮城原市図書館

1 13728935

